〔研究ノートと資料紹介〕

東亜同文書院生による満州大調査旅行記録のうち「松花江沿岸都市調査」について

東亜同文書院大学記念センター長　藤田佳久

1．東亜同文書院生による満州調査

東亜同文書院生による「大旅行調査」は1901年に書院が上海に開学してまもなく、1907年から始まり、1942～1943年まで中国、満州、東南アジアの一帯に700コースの足跡を記録した。[1] その中心は中国本土に置かれたが、満州や東南アジアにも広がり、東アジアを広くカバーした。朝鮮や台湾は早々と日本の植民地になったため、若干の台湾報告はみられるものの、主要な対象からはずされたことは今日からみると惜しい点である。

各班は3カ月から6カ月の徒歩を中心としたまさに「大調査旅行」であり、調査目的地への行路と帰路はなるべく広い見聞を深めるために、そのコースはそれぞれかなり各地をめぐるように設定された点に特徴がみられる。

各班は2から5、6名の構成員で構成され、前半の時期は毎年10班余りを数えたが、後半私費生が入学し、1学年の入学者が100名を越えるようになると、20班近くに増加した。こうした徒歩中心の大調査旅行が半世紀近くにわたって組織的に実施されたことは、世界でも類をみない規模であった[2] それは、学生の手になるとはいえ、日本国内の各県から選抜された書院生はかなり高いレベルにあり、進取の気性をもった調査とイデオロギーのない客観的記述を行った点で、その記録は当時の中国を中心とした東アジア、東南アジアの状況をかなり適確かつ客観的にとらえ、今日からみてもかなり有効な作品となっている。

この大調査旅行が始った10年間ほどは、各人が自由に設定したテーマを追究した調査報告がレポートとして卒論になったが、旅行途中の日誌も各個人は記録していた。当初は日本人はもちろん、書院生も未踏であったコースが記録されたが、10年目にもなると、コースの重複もみられるようになり、またテーマも商取引慣行だけでなく、地理、歴史、経済、生産、文化、教育など多様化し、よりアカデミックな多面的展開をみせるようになった。それがのちに大学へ昇格する背景にもなった。前述した10年目あたりから一部に重複するコースも出てくるのは当然で、それゆえ後輩のためにも日誌による地域情報や旅行方法などを後輩へ伝えることが重要になった。こうして、卒論としての調査報告と日誌の両方が書院へ提出されるようになった。コース選定もテーマ選定も書院生達の自由な選択によるものであり、卒業後中国内で就職し生活する者のみならず広く見聞を広める大きな経済であり、チャンスであった。

2．満州調査の動向

そのような中で満州調査も中国本土に比べればかなり少ないが当初から試みてきた。当初は営口など南満州の貿易港と後背地の調査や吉林省の地誌的調査[3] などからスタートした。当初はまだ卒業生もいなかったり少なかったりした時期に、資料収集や調査実施は大変であったように思われ

るが、多様な在満中国人組織などへの調査も行ない、満州地域調査の基礎をつくった。その後、書院の卒業生が満州地域へも入り込むようになったり、満鉄による調査研究活動が活発になると、在満の日本人組織からのきき取りや資料収集もみられるようになり、満州調査も少しずつ進むようになった。

その満州調査が一気にすすむようになったのは、日本の関東軍が生起させた満州事変であった。これより、書院はそれまで築いてきた清朝政府、それに続く民国政府との友好関係もその直後から2年間、書院生へのビザ発給停止により大きな影響を受けた。

中国本土に大調査旅行を予定していたその年の各調査班は、突然中国本土へのビザが発給されない事変に直面し、急拠関東軍の支配下に置かれた満州調査へ変更せざるを得なくなった。とりわけ、初年度は予備調査も不十分で満州調査旅行へ全員が向かわざるを得なくなった。こうして2年間全員が満州調査に従事することになった。それまでは各期に満州調査班は皆無の年もあり、多くても1～3班の年もあった程度であったが、それなりに力作の報告書がまとめられた。

こうして、昭和7年（1932）と昭和8年（1933）の2年間は書院生は満州調査しか出来なかった。広い満州とはいえ、開発は中国本土に比べ圧倒的に遅れていた。そこへ多くの班が集中して従来通りの方式を探れば重複が目立つことになるに違いなかった。その中で、各班に県別の調査を行わせ、多くの班をそれに割当てたのは流石の方法であった。このような方法はそれまでの書院生による自由で自発的な調査研究テーマと調査コースの設定とは異なった。従来、満州の各県を単位としたレベルの調査はほとんど行なわれなかったがゆえに、苦肉の策とはいえ、県レベルの書院生の調査がこの2年間で一気に進んだ。この点とその内容についてはまた別の機会に述べたい。

このような2年間の満州調査は2年間における満州の県レベルの記述と分析をもたらしたという点で従来にない画期的で重要な成果をもたらした。[4]

ところで、今回取り上げた満州の松花江沿岸の調査報告は、そのような満州国成立直前の成果である。したがって、日誌ではない調査報告者は松花江沿岸の都市調査を目的としたものであり、そのあとの満州事変後2年間、満州しか調査できなかった時に行なわれた県別調査ではない。

班員のうち何人かは目的とした特定地域での特定事象の調査が中心であったが、ここで取り上げた松花江沿いの都市調査は、この班の調査班員のうちの1人がこのテーマで調査し、報告書を作成したものである。

3.「松花江沿岸都会調査」報告書について

(1) 大調査旅行コースとその時代

この「松花江沿岸都会調査」[5] 報告書は第26期生が行った19班のうちの1班の構成員1名によって執筆されたものである。この第26期生は1926年（大正15年4月）に入学し、最終学年である4年目の1929年（昭和4年）にこの大調査旅行を行った。設定された19班のうち、6班が満州そのもの、あるいはコースの一部に満州が入っており、満州にこれだけの班が設けられたのは珍しい。その背景には中国本土での内乱の激化とその一方での満州への関心の高まりが反映したものと思われる。

この第26期生の在学期間は中国国内の激動の始まりの時期であった。将介石が指揮する国民革命軍は1927年（昭和2年）に武漢から南昌、さらに南京へ進出拡大し、1928年3月には上海へも進出した。その中で共産党指導のもと上海の労働者のゼネストが行なわれ、将介石の共産党弾圧により国共分裂となった。1928年夏には張作霖の爆殺による奉天派軍閥の勢いが衰える中、将介石の北伐軍は長江を越えて北上、日本軍との間で済南事件をもたらすものの北京へ進出、全国を統一するという激動期であった。

そんな中での大調査旅行は第26期生に厳しい環境をもたらした。満州調査班の数がふえたのもそのような厳しい環境をあらわしたものであるが、しかし、コース全体をみると、満州だけでなく、内陸奥深くの四川省や貴州省、さらには東南アジアにまで広範囲に足跡を刻んだ。

しかし、満州では張作霖に対する関東軍の爆殺により、満州一帯の軍閥政治の基盤はゆらぎ、張作霖を継承した張学良は張作霖の満州自立化方針を一変させ、将介石の支配下に入ることに決めるという大きな変化が生まれた。その結果、その時点直後から、満州全域に国民党の青天白日旗がひるがえることになり、急拠満州全域の行政組織化がすすむことになった。このあとの時期に満州へ大旅行を行った書院生達はそのような光景や各行政組織に出会うことになった。そしてそのことが関東軍の満州事変を引き起こすことにつながり、さらに「満州国」設立へと続くことになった。

そのように満州も激変していくことになるその直前にこの第26期生によるいくつかの満州調査旅行が行なわれた。記録の中からそのような嵐の前の静けさに似たふんいきを感じることができるように思われる。

ところで、この26期生が実施した19班による大調査旅行記録の活字化されたダイジェスト版は、旅行が実施された翌年の1930年（昭和５年）に『足跡』というタイトルで刊行された。[6]

この『足跡』の中で、この班は「極光を慕ひて」というテーマで自分達の班の大調査旅行を記録している。[7] それによると、班員は木島清道、尾仲嘉助、田島清三郎の３名であることがわかる。その顔写真を写真１に示すが、どの写真が誰であるかは明記されていない。なお、木島清道は卒業後外務省から満州林産会社へ、戦後は立川米軍管理部に勤務、また田島清三郎は卒業後協和会外交部で新京、新義州、北京と巡り、引揚後は埼玉県行田高校の教員になった。尾仲嘉助は卒業後死去している。[8]

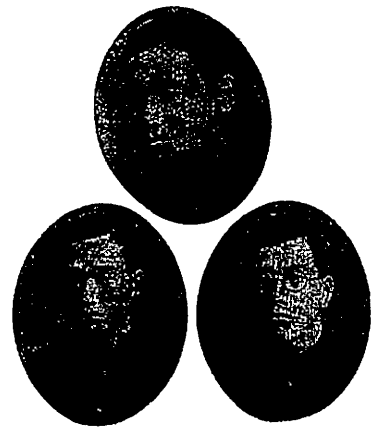

写真１　班員の田島清三郎、大島清道、尾仲嘉助

このダイジェスト版の中での「極光を慕ひて」の目次は

序曲—旅立ち
大連
平沙の憂ひ
奉天、長春
陶頼伯、伯都納
哈爾濱
キタイスカヤ街の夕立
憧憬のスンガリへ
新旬
トローミーの夕
三姓
人生の姿
富錦
スンガリーの流れ
小さい結び

となっており、ほぼコース順の記録となっている。

文中を読むと、「Ｏは６月19日哈爾濱に引かへす[9]」とあり、体調を崩したＯが三姓まで来てハルピンへ先に戻ったという記録があり、それに続いて「Ｔと私は予定を継続する事になって20日に東を指してズンガリを下ることにした[10]」とある。つまり、ハルピンから松花江を下り、三姓まで来たところで班員のうちＯは体調の悪化でハルピンへ戻り、執筆者とＴはさらに松花江を

下り、湯源、富錦、臨江へと松花江を下ったということである。

このうち、文中のOは尾仲嘉助の姓の頭文字のアルファベットであり、Tは田島清三郎の姓の頭文字のアルファベットであると考えられることから、このダイジェスト版の本文を執筆をしたのは残る1人の木島清道であるといえる。

一方、「松花江沿岸都会調査」報告書の文中には「K」と「木島」の名前が班員名として一瞬記されている。[11] この調査報告書は三姓以降も富錦、臨江まで記録されているため、三姓からハルピンへ戻った尾仲嘉助の筆でないことは明らかである。したがって、この調査報告書の方は田島清三郎によって執筆されたものと考えられる。

また、このコースの日誌にあたる手書きによる「第八十四巻　調査旅行日誌」[12] は文中に「木島」の名を班員名として記しており、また三姓より下流も記しているため、清三郎の作品だといえる。

(2)「松花江沿岸都会調査」の概要と章立て

この調査報告書を独立した調査報告書としてみると、前文が欠如し、なぜ松花江流域の都市を対象としたかについては触れられていない。この班全体のまとまりの中で、他の班員が自分の調査報告書の巻頭で述べているものと思われる。

したがって、執筆者はいきなり対象都市の最初からすぐ内容に入っている。それを承知で全体の章立てをみると、それ自体は単調で、執筆者が都市を松花沿いに記録していく方向でまとめられている。

すなわち、第一章は小城子（陶頼昭の元の名称）、第二章は伯都納、第三章はハルピン、第四章は呼蘭、第五章は木蘭、第六章は三姓、第七章は湯源、第八章は樺川、第九章は富錦、第十章は臨江、と松花江の流れに従って10都市が選ばれている。

そこでは例えば都市の大きさの順というように、何らかのまとめ的な論述はみられない。また、対象となった都市がどのような基準で選ばれたかについても不明確である。

タイトルで示された「松花江沿岸都会調査」のうちの「都会」は、当時まだ「都市」という用語が用いられるのが一般的でない時の呼称で、あまりその概念も明確でなく、「田舎と都会」というような用いられ方であり、感覚的な概念であったといえる。しかし、本論では、「都会を「都市」と言い換えて表現することにした。

次に各章の構成をみると、第一章の小城子については、第一節「位置」、第二節「沿革」、第三節「人口」、第四節「官公街」、第五節「工業」、第六節「商業」と展開されており、全章のほぼ標準的な構成となっている。しかし、第二章の「伯都納」では、第四節に「市街の概況」、第九節に「通貨」が付加されている。

また、最大の都市ハルピンでは、第四節の「市街の状況」が (1) 埠頭区、(2) 八区、(3) 新市街、(4) 馬家溝、(5) 頭道街、(6) 伝家甸、と6地区に分けられて記述されており、当時のハルピンは都市としてすでに都市内が機能分化するほどのレベルに達していたことを示している。また、官公署についても (1) 日本側の官公署、(2) 支那側、(3) 外国側と区分され、日本支那以外の国々はかなり多数にのぼり、それぞれ領事館を設置しているほどの国際的都市であったこともうかがわれる。

さらに、商業についても多様な国々の商業施設を示す節に分けられ、国際的都市の内的充実ぶりが裏付けられている。それは企業についても同様で、欧米系企業がハルピンに進出している状況を示し、ハルピンの国際性がさらに明らかにされている。また、それらに関連して通貨についても言及し、その国際性が金融取引にも及んでいたこと、しかし、そこで用いられる通貨はかつてのロシア通貨の卓越性が国際関係の中で変化してきたこと、また支那側も政権からみの通貨変動をみたほか、国際的な通貨操作を行ったことなど興味深い事象が展開していたことを記録している。

次いで第七節の工業では、製粉業、油房業、醸造業などを挙げ、この醸造業では、ウォッカ、ビー

ル、日本資本による醤油の各生産について言及している。

呼蘭についての構成は一般的だが、商業が必ずしも盛況でない中、東西大街と南北大街を中心にした事業所を示し、また鉄路の開通が都市の盛衰に大きな影響を与えることなど、明らかに現地観察をふまえた呼蘭の特徴をまとめている。

第5章の木蘭については節を設けずきわめて簡単にまた包括的に述べている。木蘭はかつて索羅章口と称し、光緒34年に木蘭県として独立した。しかし、この時期、近くの新甸の方が大きな町であり、活気もあって農産物の輸出がそれを支えていることを指摘している。

第六章の三姓は松花江と牡丹江の合流点にあり、ハルピンよりも下流の都市の中では最も大きな都市である。そのため、第一節は位置、第二節は三族の統沿の中心地としての地名の由来、18世紀以来の市街化の中での中心性の高まりとともに10以上の県を統轄する行政中心地になった「沿革」、第三節は「人口」、第四節は「市街ノ状況」、第五節は「官公衙ソノ他ノ機関」、第六「産物」、第七節「商業」、第八節「輸出」と第九節「輸入」は物資の集散地の機能を示し、日本品の広がりと高いウエイトも示している。しかし第十節は「工業」ではみるできものはなく、第十一節「金融事情」では貿易が活発でありながら金融機関も不活発な状況にあり、バランスを欠いた状況をうかがわせている。第十二節「交通」では船舶航路と浅瀬の問題を示している。そして最後の第十三節では「在留邦人の状況」がまとめられ、馬賊の来襲を恐れ、城内に中国人と雑居し、その多くが朝鮮系「娘子軍」だとしている。

第七章「湯源」は第七節まで簡潔にまとめられ、第八章「樟川」も同様である。

第九章「富錦」は松花江下流域での中心地として、交通の要衝でもあることから第八節「交通」が設けられている。

第十章「臨江」は松花江のさらに下流にあり、同じく黒竜江との接点にあり、「交通」の節が設けられている。

以上、呼蘭を除けば他の9都市については、位置、沿革、人口、官公署、工業、商業、市街地、特産物、通貨、交通などの節がその多くの場合に設けられており、それにより松花江流域の都市比較が可能になる。

4．松花江流域の都市の特性と都市システム

そこで、それらの項目の若干から対象となった松花江流域10都市の特性を簡単に比較することができる。

(1) 位置

対象とした10都市はテーマに示されたようにいずれも松花江沿いに位置する（図1）。これは松花江を上下した班員の観察がベースになっているためである。そのため観察できなかった都市は対象となっていない。記録の中に出てくる新甸の町はそのような例だといえる。

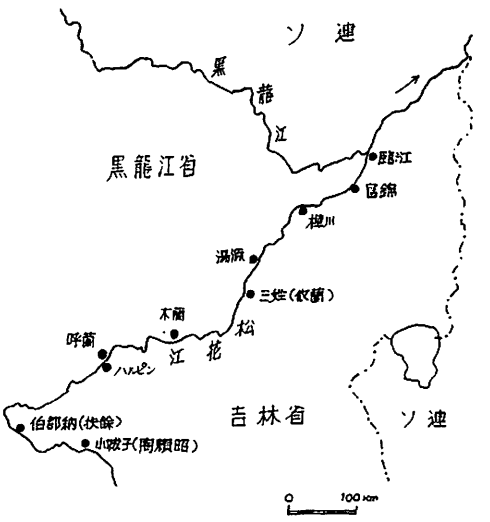

図1　松花江沿岸の対象となった10都市の分布図

ただし、当時の松花江沿岸は、のちに鉄道敷設計画が浮上するものの、交通手段は松花江の航路しかなく、燃料の薪を入手するために主な都市や都市ではないが燃料補給地に寄港していた。したがって、書院生を含め寄港時には町を観察することが出来たし、宿泊地では現地での調査もできた。

したがって、ここに対象とされた10都市はそのような寄港地を中心にした松花江沿いの主な都市（というか多くは町）をほぼカバーしているといえる。

(2) 沿革

問題はそのような松花江沿いの地点になぜ都市が形成されたかにある。

満州でも東北端に位置する松花江流域は、清国時代には19世紀なかばまで都市を形成するような拠点はなかった。そこに変化をもたらしたのは帝政ロシア時代末期に拡大したシベリア開発で、黒龍江以北をロシア領とする条約を結ぶとさらに黒龍江以南への進出が図られ、満州北部を東西に貫通する東支鉄道を完成させるに至った。その東支鉄道と松花江との交点は鉄道と航路の支点となり、ロシア側の手でロシアの市街が形成された。それがハルピンでその後、土地の買収もすすめ、今日なお中心部はロシアの都市景観を温存させている。

そのようなロシア側の南下の動きに清朝政府は危機感を抱き、満州族の各旗を中心とした拠点づくりを図ったが、政権のトップは北京に安住し、しかも漢人文化に溶け込みつつあったため、対ロシア体制はとれず、そこでそれまで、満州族の聖地であり封禁の地として漢人の入満を禁止していた政策を一部ゆるめ、1880年代には満州の一部を漢民族に開放した。漢人の入植を認めることで対ロシア南下政策に対抗しようとしたのである。

しかし、それがすぐ漢人の入植につながったわけではなかった。寒冷な気候下の農業は漢人にとっては未経験の世界であったかりである。

それが進行するのは、日清戦争、日露戦争による清国勢力の衰退、そして1911年の辛亥革命が満州を権力の空白域とし、そこに漢人の出稼労働から始まる流入と一部入植が具体化するようになってからである。そのさい漢人による満州人からの農牧地の安価な取得と満人が使用していた馬の農耕への転用という工夫が漢人による満州農業を可能にした面があった。南満州鉄道の開設はそのような動きを加速した。

以上のような19世紀半ばから20世紀前半にかけての満州をめぐる国際関係と国内状況の変化の中で、満州の都市の形成と発展がみられた。対象として取り上げられた都市のうち、伯都納や樺川、富錦、臨江はいずれも清国の対ロシア政策の中で設置された都統や副都統など行政末端組織の拠点がその原点であり、湯源は光緒時代の開墾拠点として封禁が解かれた拠点が原点であった。それに対してハルピンや陶頼昭（小城子）は鉄道敷数にともなう松花江の水運との交点という位置をベースにした交易都市として形成された。とりわけ、ハルピンは国際都市としての性格をもたらし、それをめざして漢人が流入し、人口が急増して都市形成が短期間に進んだものである。

(3) 人口

漢人の満州への流入は1920年代がピークであった。漢人の出身地は貧しく内戦の絶えない山東省がほとんどで、そんな彼らへの救援物資が来る満州への憧れが口づてに広がり、満州への移民運動にまで発展した。いわば山東省民の救貧運動としての満州移民であった。出稼労働が多数を占め、満州の都市への流出のほか農業労働者しての入満も多くみられた。

そのピークが1920年代で、毎年100万人ほどが満州へ渡った。大連など港へ航行する日本の汽船会社や満鉄は大幅なディスカウント料金で漢人を輸送し、貧しい漢人移民に炊き出しのサービスを施したほどである。

その1920年代の末期がこの報告書のまとめられた時期で、この直後に起った満州事変以降は漢人の入満者が大幅に減少することから、この報告書は漢人の入満者の10年間のピークのまとめ的な役割も果たしている。

この報告書に記録された都市別人口のデータを地図上に示したのが図2である。それによれば、明らかにハルピンの人口が他の都市を大きく抜

きんでている。総人口は38万人で当時の大連と同規模。言うまでもなく、ハルピンはロシア人が東支鉄道の拠点として建設した町であり、この当時7万人余のロシア人が居住し、北満最大の都市であった。そこへ入満した漢人が集中し、人口を増加させたのである。

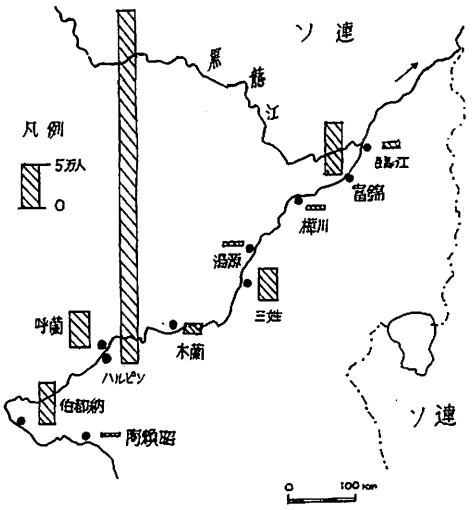

図2　松花江沿岸10都市の人口分布（1930年頃）

それに次ぐのは松花江下流のまず富錦で、人口が5～6万人。小麦と製粉、それに大豆の集散地だが、元々は寂れた町だったとしている。この時期はハバロフスクの影響もありハルピンに次ぐ人口規模となった。次いでハルピンより上流の伯都納の5万人弱。ここは清国時代の行政中心地がベースで、そこに漢人が押し寄せた。そしてハルピンの対岸の呼蘭の約4万人。松花江を挟んだハルピン対岸にあって左岸側の後背地を背景にしている。その下流の三姓は3.6万人。

以上からみると、ハルピンは断突の最大の中心地でありそれを第1位中心地とすれば、そのもとに、上流から伯都納、呼羅、三姓、富錦が松花江沿いにほぼ等間隔で第2位の中心地として分布している。河川沿いの第2位中心地の均等的配置とみれば、他の都市はいずれも人口1万人未満で、やはり均等的に分布している。ハルピン対第2位中心地の人口割合と同様の割合で第2位都市に対して第3位の都市が配列していて、フォン・クリスターが同じ頃著した『南ドイツの中心都市』[13]で展開した中心地体系を河川や道路という線上に展開することができそうな現象であり興味深い。

では、以上のような人口分布の中で、日本人はどのくらい居住していたのか。報告書の中のデータはハルピンと三姓しかみられない。図3はそのデータを人口分布図として示したものである。当時、南満州には日本人が都市部にかなり居住するようになっていたが、北満ではハルピンが最多であった。多くは事務所、商店の経営者と従業員、日本商品の販売者であった。職業内容はきわめて多様で、新天地に移民した日本人の進取性をうかがい知ることができる。

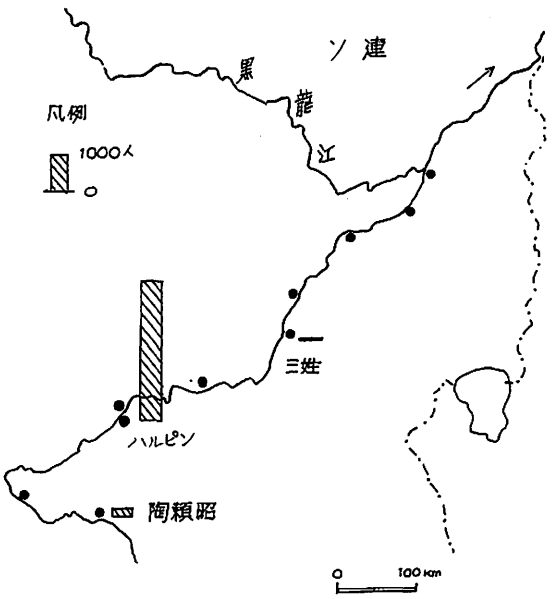

図3　松花江沿岸10都市のうち記述された日本人の居住人口（1930年頃）

その他では、三姓の日本人が48名を数えるが、そのうち42人は「娘子軍」であったとしている。なお、書院生の満州、中国、東南アジアの第旅行記をみると、その最前線には日本人、のちには朝鮮人の「娘子軍」が多数居たと記している。それは今日問題になっている従軍慰安婦以前からの存在であり、大陸奥地にまで送りこまれていた日本女性の存在はもっと研究されてよい。日本人の多くはハルピンに居住していたことがわかってい

る。

(4) 公安署や事業所と都市機能

報告書の記録には公安署と企業事業所なども記されている。そのすべてが記されているのではないと思われるが、小さな町であり、目立つところについてはそのほとんどを網羅しているとみてよい。

それによって各々の都市がどのレベルの行政管理力を有していたか、また経済的な力をもち、経済圏の中枢であったかをうかがい知ることができる。

図4はそれらの個々の数を単純に合計した数を都市別の分布図として示したものである。それによると、人口と同じくハルピンが断突に抜きにでている。ここには他の都市にはみられない各国の領事館や銀行も数多く含まれており、ハルピンが当時内陸、北満で最大の国際都市であったことがわかる。そしてロシア通貨が有力であったことは伝統的なハルピンの歴史性を意味している。そしてそれらが強大な中心地機能の役割を果たし、人口規模も最大となっていたことがわかる。

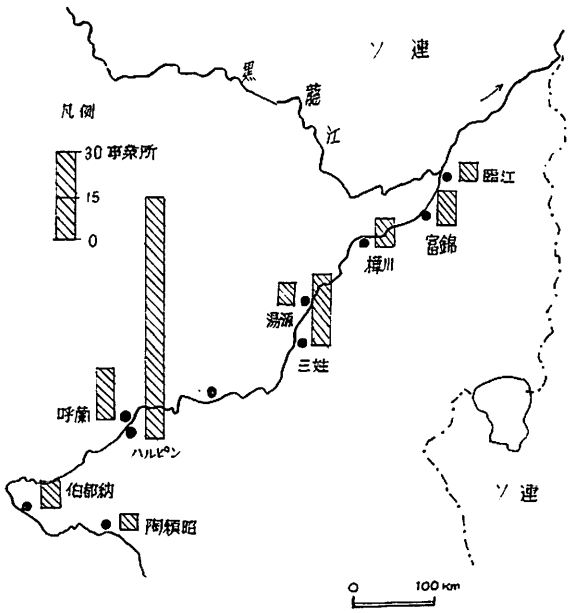

図4　松花江沿岸10都市の主な事業所・行政機関の分布(1930年頃)

次いで三姓が人口規模で富錦や呼蘭に若干劣っていたが、これら官公農や事業所数では第2位の規模となっている。これは松花江と牡丹江の合流点の位置が、ハルピンを除いて他都市にはみられない両流域に広がる経済圏を有するようになったためであるといえる。次いで呼蘭がハルピンの対岸で第3位のレベルにある。三姓のような立地地点の特性による中心地機能の高まりはその特性として認められるが、一般的にみれば、事業所による中心地階層は人口による中心地階層とほぼ相関的な関係を示しているということができる。そして、このことは北満の開拓途上にある地域の都市形成とそのレベルは、求心的な行政機関や事業所の中心機能のレベルと強い関係をもちながら展開しつつあることがまた記録されている。それは各都市の商店街のレベル、商業活動とのレベルにもはっきりと反映していることがうかがえ興味深い。

ただし、これらの都市の支持基盤の多くは周辺農村からの小麦や大豆の集散地としての機能であり、それが経済的基盤となっている。一部は製粉業もみられるが、見るべき農産物加工業は全体的に未熟であり、その他の工業も地元の生活に密着したレベルの加工業で、多くは日本品を含め輸入や移入品でまかなわれている。それらの点からいえば、漢人の流入人口は北満に関しては当時またその絶対数は少なく、またその歴史もきわめて新しいことから都市内部での資本は十分でなく、内発的な産業資本の形成には至っていなかったことがわかる。ただ唯一、ハルピンだけは都市らしさを備えていたが、それも経済的基盤はロシア人の活動の低下と新たに流入した漢人との組み合わせの中で、消費都市のレベルに留まっていたこともうかがわれた。

5．土地利用

最後に当時の松花江沿岸の土地利用はどうであったかについてみてみる。

研究対象は10都市だが、都市と都市を結ぶ交通路は水運であり、書院生達は船の中から時に沿岸

の景色を記録している。しかし、夜の航行や停泊も多く、それが主要な調査でないため詳細な記録はみられない。

そこで同じ26期の別班で黒河から黒龍江を下り松花江を上った「呼倫墨黒交通路班」のダイジェスト「白樺の口吻」[14]の記録の中からも沿岸の土地利用状況を拾い出し図化したのが図5である。

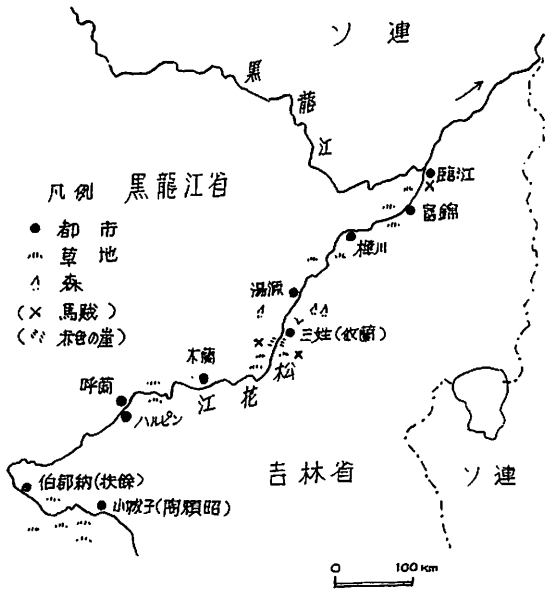

図5　松花江沿岸の対象となった10都市の分布図と松花江沿岸の土地利用

それによると、対象都市を結ぶ松花江沿岸は草地の多い平原が卓越し、局地的に森がみられるという土地利用状況である。もっとも6月の時点であり、草地の中には植村直後の高粱も含まれていたであろうが、船上からはその区別はむつかしかったと思われる。

しかし、各都市の輸移出品は高粱や大豆であり、都市の後背地を高粱や大豆の土地利用が多少なりとも形成していたものと思われる。三姓のような牡丹江との合流点では、牡丹江流域の物資も流入しており、同流域に少し農地の広がりがみられたことも推察される。

また、汽船は薪を燃料とし、町だけではない寄港地での薪の積み込みがあった。背後の山には森があり、そこからそれらの薪が供給されたこともわかる。森も存在していたことがわかる。

そんな三姓や最下流の臨江を時々馬賊が襲ったと記されており、町だけでなく農民達も馬賊の襲撃を恐れていたことがわかる。松花江流域は馬賊の勢力が強く、のちに満州国が成立したあとも関東軍にたびたび立ち向かった記録がある。

いずれにせよ、松花江沿岸の都市以外の部分は入植者が多少ふえたとはいえ、自然の原形を大きく変えるほどではなかったといえる。

6．まとめ

以上、第26期生による1929年（昭和4年）に実施された調査旅行19班の報告書のうち松花江沿岸の都市を比較研究した報告書を取り上げ、描かれた地域状況を検討した。またあわせて同班の調査旅行日誌」、ダイジェスト版の中に収められた「極光を慕ひて」の旅行記録も参考にした。

実施時期は満州事変の起きる直前にあたり、満州が満州事変から満州国へと激しく移り変わる直前の初期状況を記録した点で貴重だといえる。しかし、中国本土のもっぱら徒歩による調査旅行がきわめて稠密な記録内容をもつのに対して、当時の満州は漢人が流入しはじめたとはいえ、北満州はまだ大きな変化をもたらすには至っておらず、地域情報は単調な側面があった。他班のように興安嶺を徒歩で横断する例など本来の徒歩調査もあったが、本班のように鉄道と水運で全行程を終始した例もあり、それゆえ全体として記録も比較的疎である面は否めない。

それでも当時の状況はこの調査報告書に加え、同コースの手書きの旅行記、それに同期のダイジェスト版の記録を付加すれば、総合的かつ立体的に松花江沿いの都市群（といってもハルビンを除けば「町」）の様子がわかる。それらの規模と立地配置から都市システムが形成されつつあること、立地配置は水運による都市間の距離であり、そんな中で三姓はハルビンから一定の距離を隔て、しかも牡丹江との合流点に位置して松花江以

外にも経済圏を形成できる好条件がハルピンに次ぐ第2レベルの中心地となったこと、その両都市の間に第3レベル以下の中心地が配置される原理を読みとれること、また、人口規模だけでなく、中心業務機能の大きさからもそれが読みとれることがわかった。

ハルピンは都市成立基盤がロシアの東方拠点として形成された特殊性がみられるが、そのような核に漢人や日本人、さらに他の国々の人が集まり、北満における上海のような状況を生んだ。東支鉄道と松花水運との接点がその後もこの都市を育てつづけたといえる。

しかし、「このズンガリには1924年正月二十二日付の、東三省保安総司令よりの一片の布告によって、三色旗をズンガリにおける外国勢力の最後の名残りとして駆逐してしまった。」[15] という状況の変化があり、松花江のロシア勢力を弱め、国際河川的な役割を終える新たな局面を迎える年になった時の大調査旅行であった。一行がロシア船に代わり東北航務局の汽船に乗ったり、急に青天白日旗が町の中に飾られたのを見たのはそのような時代背景があったのであり、それまで空白的であった満州をめぐる支配権争いに民国政府が東三省に先手を打ったということをうかがわせる。

このような東三省側の動きは、日露戦争後の日本の満州進出後の状況にも及び、日本人の商売を認めた「商務地」の城外のみへの設定、水田耕作を自力で開拓した朝鮮人農民への圧力となってあらわれ、ロシア人につづく日本人への排斥の動きがその後の両国間、とりわけ日本の関東軍と軍閥張作霖との緊張関係をもたらし、関東軍による張作霖の爆殺、次いで満州事変、満州国の成立という激動の時代へと入っていく予兆として読み取ることもできる。

〈付記〉

本研究ノートを作成するにあたり、平成21年度文部科学省科学研究費基盤C「東亜同文書院生の「大旅行」記録による20世紀前半期満州の地域構造研究」(課題番号21520804)の一部を使用した。

〔注〕

1）藤田佳久（1993）「幻ではない東亜同文書院と東亜同文書院大学」,『東亜同文書院大学と愛知大学』, 六甲出版所収。
2）藤田佳久（1989）「東亜同文書院学生の中国調査旅行コースについて」,『愛知大学国際問題研究所紀要』, 第90号。藤田佳久（2000）『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』, 文明堂, 再録。
3）東亜同文書院支那調査報告書（1907）「営口調査」など。(手書稿本)。
4）前掲3)。
5）田島清三郎か（1930）東亜同文書院大調査旅行報告書のうち第23回, 第84巻「松花江沿岸都会調査」(手書き)。
6）東亜同文書院（1930）『足跡ー第26期生大旅行記念誌ー』、東亜同文書院, 494p.
7）木島清道か（1930）「極光を慕ひて」、前掲6）所収。p. p. 352～384.
8）東亜同文書院（1955）『東亜同文書院大学史』、p. p. 242～243.
9）前掲7)。p. 376.
10）前掲7)。p. 376.
11）前掲7)。
12）田島清三郎か（1929）「第八十四巻. 調査旅行誌」(手書き),『東亜同文書院第調査旅行記録』所収。
13）フォン・クリスタラー（原著1933, 日本語訳1986）『都市の立地と発展』, 396p. 大明堂。
14）大久保英久か（1930）「白樺の口吻」, 前掲6）所収。
15）前掲7)。p. 376.

〔資料〕

第23巻、第84巻、調査報告書

東亜同文書院大学記念センター長　藤田佳久

第84巻　松花江沿岸都会調査

第1章　小城子

第1節　位置

鉄道ニヨリテハ	ハルピン迄	76哩
	長春迄	73哩
松花江ニヨリテハ	ペトナ迄	84哩
	ハルピンヘ	167哩
陸路ニヨリテハ	ペトナヘ	40哩

第2節　沿革

陶頼昭八元小城子ト称シテ一寒村ニ過ギザリシガ、北方8支里ノ処ニ陶頼昭ガアル。元ト此地ハ吉林、ペトナ、街道ノ駅站ニシテ何等見ルベキモノナカリシガ、東支、吉長両鉄道ノ開通ト松花江ノ汽船ノ航行トニヨリ、貨客共総ベテ小城子ニ集散スルアルニ至リ、現在ニ於テハ小城子ヲ陶頼昭ト称スルニ至レリ。

第3節　人口

吾人ノ調査ニト到リシ時ハ邦人ノ戸数80戸デ、人口23名ナリシガ、何レモ「モルヒネ」ソノ他ノ密輸入品ノ売買ヲ営ムモノ多キヲ思ヘバ、寒心ニ勝ヘザルモノアリ。戸数ハ精密ナラザレドモ、第8区分所ノ報事ニヨレバ約500戸、人口2,200トアリ。

露国人デ商工業ヲ営ムモノ一人モナク、全部鉄道従業員及ソノ家族デ、朝鮮人ハ全部水田ヲ経営シテ、ソノ生産セル米穀ハ悉ク之ヲハルピンヘ輸送スル。附近ノ一帯ハ沼泥地デ、ソノ地味ハ豊穣ナルモ以テ水田経営ニ適シ、平和裡ニ鮮人ガ移住シ来リ斯業ニ従事シツヽアルハ、実ニ喜ブベキ現象デアル。更ニ水田経営ニ属スル耕地ニシテ、未墾地ニ比シテソノ面積ハ幾十倍ナルヲ知ラズ。将来ハ多クノ人口ヲ収容シウルノ余地ハ充分ニ具備シ居リ。彼ノ当業者ノ言ニヨレバ、松花江ノ流域ノミニテモ幾十万天地アリト云ヘバ、是レハ大イニ当局者ノ一考ヲ煩シ度重要点デアル。

第4節　官公衙

地方財務局、特別区第二公署、税捐局、農会、電報局、電話局等ノ官衙在リ。

第5節　工業

当地ニ於ケル工業トシテハ唯一軒ノ油房ノアルノミデ、駅ノ向ヒ右後方約2町余ノ処ニアルガ、吾人等ノ一行ノ調査当時ハ何等ノ作業モ為シ居ラズ。徒ラニ破レ果テタル家屋ガソノ侭ニシテ建ッテ居タノデアルガ、之ヲ公義合油房ト呼ビ、ソノ豆粕ハ南満ヘ向ケテ混合保管トシテ発達サレツヽアルノ有様ナリ。

第6節　商業

当地ニ於ケル商業ハソノ発送貨物トシテハ、大豆及ソノ他ノ穀類ノ取引ヲ以テソノ生命トナシ、

ソノ他ノモノハ微々トシテ不振。強イテ之ヲ挙グレバ、発送貨トシテハ鶏卵、麻袋、獣毛、野菜、木材ト家畜位ノモノデアル。又到着貨物ノ主ナルモノハ、石油、塩、麻袋、棉花、石炭、砂糖等ニシテ、之ニ亜グモノニ茶、綿布、燐寸、紙類、鉄製品等ノモノデアル。

猶ホ之ヲ忘失セルガ、陶頼昭ヨリペトナ迄ハ陸路40里、自動車ニテ8時間余ニシテ8元ナリト云ハル。約8時間ニシテ着シ、雨天ノ際ニハ道路ノ悪シキ為自動車ハナク、此自動車ハ10人乗リノモノデ相当ノ構造デ、吾人ノ乗リシ自動車は「インタルナショナル」号ノモノナリキ。

第2章　伯都納

第1節　位置

北ニハ松花江ノ本流ヲ隔テ、黒龍江省肇州県ニ対シ、西及西南方ハ南部爾羅斯旗ニ、南ハ農安県ニ、東南ハ徳恵県ニ何レモ第二松花江ヲ隔テ、相対シ、東ハ楡樹県ニ接シ、北東ハ拉抹河ヲ以テ双城県ニ境シ、而シテペトナハ県ノ西端ニ位シ、第二松花江ノ右岸農安ノ北西ニ120支里。東支鉄道ノ重要駅ハ略同距離ニアリテ、町ニハ砂地頗ル多クシテ、風多キ時ハ歩行ニ困難ナリト云ハル。

第2節　沿革

上古ノ粛慎ノ地ニシテ後漢ノ代ニハ扶余ト称セラレ、唐代ニハ渤海県ニ属シ、金代ニハ上京近幾ノ地トナリ、県ノ北方ニハ尚ホ金ノ世宗ガ建立シタル所ノ得勝陀碑ノ存在スルアリ。清朝ニ至リテ此地ニ副都統並ビニ伯都納撫民同知ヲ設ケ、次イデ同知ヲ孤楡樹ニ遷シ更ニ分防巡検ヲ設ケテ、光緒32年ノ春此巡検ヲ昇格シテ新城府トナシ、同知ヲ更メ楡樹縣トナシ、新城府ニ隷属セシメタ。民国二年府ヲ廃シテ県トナシ、ハルピン西路観察使ノ管下ニ移シ、翌3年2月各県重複県知変更ノ結果、扶余県改称セラレ以テ今日ニ及ベリ。

第3節　戸口

戸数　7,000

人口　48,000

住民ハ殆ンド漢人デ、尚ソノ物産ノ出廻期ニハ日本人ノ住居スルモノアリ。

第4節　市街ノ状況

本市街ハ西南ノ両都共ニ松花江ニ臨ミ、江ヲ隔テ、南部爾羅斯ノ如キ未開地ニ面シ、市内ハ城外ト城内トノ2大別ニ分タレ、城内ハ土壁ヲ以テ之ヲ囲繞シ、東西約2支里半、南北約2支里アリ。土壁ハ近年ソノ修復ヲ加ヘザルタメ風雨ノ崩壊スル所トナリ、現在ハ僅カニソノ形ヲ存スルノミニシテ、城門ハ東西南北ノ4門トモ存在ス。最モ繁華ナルハ東大街及南大街ニシテ、此街ニハ大商舗軒ヲ連ネ商業殷盛ヲ極ム。街路ハソノ幅5、6間、両側ハ雨天道路トシテ幅約3尺ノ木板道ヲ設ケ、各商舗ノ軒下ニハ水桶ヲ置キ撒水ニ便シ、又各街路ニハ街灯ヲ点ジ、各処ニ共同便所ヲ設クルアリ。城外ハ東門外及西門外街最モ大ニシテ、東門外ハ双城堡、陶頼昭ニ通ズル街路ニ当リ、之ニ南接シテ東園子ト称スル市街アリ。此処ニハ穀物市場ヲ設置シテアル。西門外ニハ東支鉄道会社ノ汽船埠頭及帰化ノロシア人リ、チンノ穀物倉庫アリ。南門外ハ材木商及遊郭アリテ雑踏ヲ極ム。

当地ノ市街ノ電話ハ、民国2年7月当時巡警局長多シ姜相和ノ主唱ニヨリ設ケラレタルモノニシテ、民間ノ経営ニ係リ長春和登洋行請負デ架設シタルモノニシテ、南門裡ニ壮大ナル扶余県城警察事務所アリ。洋式ニシテ2層ヲ煉瓦建物ニシテ、屋上ニハ展望台ノ設ケアリ。

第5節　官公衙

扶余県公署、警察事務所、税捐徴収局、遊撃馬隊、郵便局、電報局、清大局、陸軍歩兵営、観学所等アリ。

保衙国事務所、東支鉄道商務公司、遊撃馬隊ハ、ソノ兵員50名。知事ノ監督ノ下ニ、主トシテ県署

ノ護衛及馬賊ノ勦討ニ従事スルノデアル。保衛国ハ警察ノ補助機関トシテ組織セル所ノ一種ノ自治団体ニシテ、知事ノ監督ヲ受ケテ専ラ地方ノ安寧維持ニ当リ、現在相当ノ好成績ヲ挙ゲテヰル。観学処ハ知事ノ監督ノ下ニ管内ノ教育事務ヲ司リ、併セテ処学堂所用ノ教科書ヲ販売ス。

学生ハ従来、中学堂、農業学堂、工芸学堂アリシモソノ経費ノ不足ノタメ、民国4年中学堂ハハルピン朋堂中学堂ニ合併シ、ソノ他ハ廃止トナリ、目下ハ城内ト城外ニハ個ノ初等、高等ノ小学校及高等女学校1、国民小学校1アルノミ。

郵便局ノ経路ハ東支鉄道沿線小城子ニ至ルモノ及、大賚県南郭爾羅斯主府ニ到ルモノ等アリテ、小城子、当市間ハ郵便数量最モ多ク、毎日双方ヨリ1回宛郵便夫ノ往復アルモノヽ他ハ不定ナリ。

電報局ハ楡樹県ヲ経テ南北満州ノ各地ニ通ズルモノ及、肇州並ニ大賚ニ通ズル3線アリテ、尚民国5年度ヨリ東支鉄道沿線小城子ニ電報局新設セラレ、之ニ通ズル事トナリ、当地電報局取扱電信数ハ1日10通内外ナリ。

第6節　産物

農産物ハ当市ノ集散物中最モ主要ナルモノニシテ、ソノ出廻年額ハ通常四十万石ノ内移出サレシモノ約十万石以上ニ、ソノ移出先ハ従来、主トシテハルピン、デアッタガ、欧州戦役後ハ長春、大連方面大部分ヲ占メ、出廻穀物ハ大豆ヲ第一トシ、小麦、高粱、緑豆、包米、粟等トス。ソノ出廻時期ハ、小麦ハ九月、緑豆、高粱、包米、粟ハ十月、大豆ハ十月下旬ヨリ始マリ、ソノ解氷期ニ至ル。ソノ他畜産物トシテハ馬、牛、驢、外国種馬、羊豚等ナリ。水産物トシテハ鮭、鰤(ふな)、白魚、鰱魚(たなご)等ナリ。

特弾ノ産物トシテハ木材、棺桶類、嫁入道具ヲ主トスル。木材ハ吉林ヨリノ移入品ナリ。ソノ他籃類、麻、葉煙等ノ産ナリ。

第7節　商業

往時ハ蒙古貿易ノ市場トシテ、又奉天、吉林、黒龍江、3省ノ交通街路トシテ著シキ発達ヲ遂ゲシガ、其後蒙古貿易ハ洮南、鄭家屯、赤鋒ノ各市場ガ開発サルルニ伴ヒテ大イニ勢力ヲ此方面ニ奪ハレ、ソノ商業範囲ハ著シク狭小トナリ、附近一帯ノ300支里ニ局限セラルヽニ至リ、殊ニ東支鉄道ノ敷設ニヨリ顧客ノ大部分ヲ同鉄道ニ吸収セラレ、商勢ハ甚ダシク衰退セリ。現下当地方商業ノ中心地ハ、穀類ノ他ハ磨房ト油房トヲ兼業セル30余戸ノモノニシテ、之ニ亜グハ雑貨商ノ30余戸アルニスギズ。

第8節　工業

当市ニ於ケル工業ハ、麦粉製造、油房、焼酒製造、紙坊、粉坊、毛織物製造業、製紙業等ナルガ、何レモ支那在来ノ旧式ノ工業ニシテ、ソノ施設規模一トシテ見ルベキモノナク、穀物商、雑貨商ノ兼業タリ。油房ニハ目下30戸程アリ。

焼酒製造ハ従前ハ当地官憲ニ於テ、燃料ノ騰貴防渇ノタメ開設ヲ許サヾリシガ、石炭ノ輸入ヲ見ルニ至リタルノ結果、之ヲ燃料トスル条件ノ下ニソノ開設ヲ許サレ、民国3年以来開業者3戸ヲ見、コハ将来発展スベキ望ミアリ。

紙坊ハ現時市価暴落ノタメ苦境ニ呻吟シツヽアリ。此他ニ皮革業、毛氈業者数十戸アリ。然レドモ規模ハ貧弱デ、ソノ資本小ニシテ論ズルニ足ラズ。

第9節　通貨

黒龍江省広信公司発行ノ帖子ハ最モ広ク流通シ、日常ノ取引及地方税捐ノ標準貨タリ。従前当地ノ商務会ニ於テ経営セシ華商銀行発行ノ帖子モ引続キ、右帖子ト同様ニ相場ヲ以テ流通シ、ソノ額約27万吊文ト云ハレ、此他ニ小洋票及吉林官帖ノ流通額モ少カラズシテ、小洋票ハ主トシテ長春、奉天ノ雑貨ノ取引ニ使用セラレ、吉林官帖ハ国税ノ納付及長春、吉林方面ノ支那内地品ノ取引ニ使

用セラレシガ、ソノ後税種ノ変動ニヨリ、今ヤ江省官帖、吉林官帖ヲ主トシテハルピン、大洋ガ又ソノ間ニ入リテコレ又侮リ難キモノアリ。而モソノ中ニテ最モ流通ノ多キハ吉林官帖ナルモ、ソノ相場ノ高低常ナルタメ、漸次ハルピン、大洋ニソノ領域ヲ侵蝕サレツヽアリ。又以前ニ相当流通セシロシヤ貨幣ハ、現今ハ反古紙トシテ何人モ之ヲ顧ミルモノナキノ有様ニアリ。

第3章　ハルピン

第1節　位置

当地ハ北満ノ大平原ノ中心ニ位シ、松花江ノ右岸ニ在リテ水陸交通ノ至便ノ地タリ。即チ鉄路ハ東方「ボクラニチナヤ」ヲ経テ浦塩及鳥蘇里地方ニ、西方ハ満州里、「チタ」ヲ経テ遠ク欧露ニ連リ、南方ハ長春及奉天ヲ経テ遥カニ支那本部ノ各地ニ、又大連並ビニ朝鮮ニモ通ジ、水路ハ松花江、黒龍江ノ2大江ヲ呼蘭河、嫩江ニ於ケル汽船ノ航行ニヨリ、北方ノ哈府、汶港、黒河、武市地方ニ通ジ、南方ペトナ、吉林ニ、西方斉々哈尔地方ニ通ズ。

今当地ヨリ主要各地ニ到ル距離ヲ示セバ下ノ如シトス。

塩塩	485哩
ボクラニチナヤ	339哩
満州里	580哩
長春	149哩
大連	587哩

第2節　沿革

当地ハ露国ガ東支鉄道ノ敷設ニ当リソノ中心市場タラシメ、且ツ将来東洋ニ於ケル莫斯科タラシメントノ企図ヲ以テ建設セルモノニシテ、1896年旧哈尔賓ニソノ根據ヲ置キ、土地ヲ買収シテ以テ新市街ノ建設用地トナシ、次イテ1900年更ニ土地ヲ買収シ、大都市建設ノ基礎ヲ確立セル所ノモノナリ。然ルニ北清事変ニ煩ハサレテ全市悉ク灰燼ニ帰セシモ、1901年該変乱ノ平定ト共ニヤヽ復旧ヲナシ、1903年ニ至リ更ニ松花江西方ノ原野ヲ買収シ、次イデ1904年日露ノ開戦トナリ数十万ノ貔貅ハ此地ニ転戦シ、各々将来ノ戦勝ヲ夢見テ新企業ノ勃興隆盛ヲ極メタリシガ、該戦ノ結果ハ甚ダシクソノ予想ヲ裏切リ、ソノ反動トシテ慌恐ハ襲来シ、漸クモ発展ノ途上ニアリシ商工業モ一時悲惨ノ境ニ沈淪スルノ余儀ナキニ至レリ。然レドモ後数年ナラズシテ、先ヅ製粉業ガ復活シ初メ次イデハ大豆ノ輸出トナリ、加フルニ蒙古貿易ノ途開クルニ至ル等市況恢復ノ動悸トナリ、漸次ニ好況ニ向ヒツヽアリシガ、折柄偶々欧州大戦ノ勃発トナリ、我国モ亦聯合国ニ与シテ大イニ援助ヲ与ヘテ露国ニ向ヒ、米国ト相携ヘテ物資供給ノ衝ニ当ルニ至ルヤ、当地ハソノ物資ノ供給上ノ好地トシテ、取引場トシテ俄然トシテソノ殷賑ヲ見、且ツ北満農産物ノ海外輸出盛トナリタルタメ、之ガ中心市場トシテ、大イナル一大発展ヲ為セルモノナリ。

第3節　戸口

昭和元年度ニ於ケル調査ニヨルニ、哈府ノ戸数及人口ハ次表ノ如シ。

人種別	戸数	人口
日本人（鮮人ヲ含）	1,767	4,426
中国人	36,994	311,260
露国人	32,503	71,196
英国人	53	129
独乙人	54	134
仏国人	35	131
米国人	40	100
墺国人	2	4
丁抹人	14	32
伊国人	7	22
波蘭人	136	507
葡萄牙人	1	3
チェッコ・スラブキヤ人	6	23
拉丁人	6	11

猶太人	175	1,361
アルメニヤ人	8	24
瑞典人	1	6
ブルガリヤ人	2	5
印度人	1	6
和蘭人	3	8
土耳古人	3	16
計	61,811戸	389,404人

以上ノ表ニヨリテ明カナルガ如ク、ソノ人種ハ多様ニシテ、先ヅ日、露、支ノ3国人ヲ中心トシテ、英、米、独、仏、白墺、瑞西、瑞典、丁抹、波蘭、印度等ノ30個国ノ諸人種ヲ網羅シ、恰カモ大種展覧会ノ如キ観ガアル。又人口増加ノ趨勢ヲ見ルニ、大正5年ニ於テハ漸ク10万人ニ過ギザリシモノガ、欧州大戦ニ伴フ海外貿易ノ発展ト当地経由奥地取引ノ旺盛、聯合軍ノ西伯利亜出兵、避難民ノ襲来、将来ノ思憾等ニヨリ急激ノ発展ヲ見タルモノデ、就中傅家甸ノ発達ハ実ニ驚歎スベキモノアリ。此間ニ同市街地面積ノ如キハ、之レガ倍加スルヲ見タノデアル。

次ニ邦人ノ状況ヲ見ルニ、ハルピン市建設ノ当初ハ東支鉄道ノ工事ニ従事セル僅少ナル請負者ニ過ギナカッタガ、之ニ附隨シテ洗濯屋、時計屋、又娘子軍ノ入哈ニヨリ、日露大戦勃発当時ニハ疾クモ1,000名ニ達シタガ、該戦役ノ結果、二、三ノ特務機関ヲ除キ全部引上ゲテ、戦後ノ38年ニハ早クモ再ビ入哈シ始メソノ数320名ノ数ニ達シタガ、依然トシテソノ大部分ハ娘子軍デ、僅カニ洗濯屋、時計店ガアルノミデアル。

然ルニ明治ノ40年ニ至リ、三井物産ガ進出シテ北満大豆ノ欧州輸出ヲ試ミルアリテ、次イデ帝国領事館ノ設置トナリ、邦人ノ移住ハ漸次増加ノ趨勢ニ向ヒ、尓来年ヲ逐ヒテ着実ナル実業家ノ来哈スルモノ多ク、更ニ欧州大戦ニ際シ財界ノ好況ニ伴ヒ著シク増加ヲ見、大正8年ニハ一躍シテ4千数百名ニ達シ、彼ノ一時的ノ旅行者ヲモ合算スル時ハ、無慮実ニ7,000名トモ称セラレシ事ガアッタガ、偶々世界的ノ財界ノ不振ノ影響ヲ受ケテ、大正9年ニハ約800名ノ減少ヲ見タ。

第4節　市街ノ状況

当地ハ次ノ如キ各区ヨリシテ成レリ。

（イ）埠頭区

俗称タオリ（道裡）ト称シ、東支鉄道ノ附属地ニ於ケル商業地区ニシテ、日露ソノ他ノ外人経営ノ銀行会社、商店ハ主トシテ此内ニアリ、区ノ東部ハ日本人街ト称スベク、正金支店、朝鮮支店、ハルピン支店、龍口支店等ノ諸銀行ヲ初メ、東拓、三井、三菱、ハルピン取引所、国際運送等ノ大会社ハ勿論、小商店ニ至ルマデ多ク此地ニ集中ス。之ヨリバザールノ日用品市場ヲ隔テ、、西ニ「キタイスカヤ」街ヲ初メトシ、幾多ノ露人そノ他ノ外人ノ商業地アリ。外人ノ此地ニ店舗ヲ構フルモノ軒ヲ並べ、就中「キタイスカヤ」街ハ最モ繁華ノ街ニシテ当市ノ銀座通リトモ称スベク、諸種ノ高等美街雑貨店櫛比シ、各自ニシヨウ、インドノ装飾ヲ競ヒ、昼夜男女ノ往来識ルガ如ク頗ル殷盛ヲ極メ、表面不景気ヲ知ラザルモノ、如シ。

（ロ）8区

埠頭ト傅家甸ノ間ニアリテ工場及倉庫地区トモ称スベク、哈市ニ於ケル製油、製粉諸工場ノ大部ハ此処ニ集中セルノ観アリ。我満州製粉会社ノ工場モ亦此ニアリ。

（ハ）新市街

土地高燥ニシテ樹木多ク、道路清潔ニシテ良好。埠頭区ノ商業地区タルニ対シ、此地ハ官衙地区ト称シテ可ナラン。東支鉄道庁、高等審判庁、護路軍司令部、東支鉄道督弁公署、ハルピン駅ヲ始メ、各国領事館、満鉄ハルピン事務所等皆此中ニアリ。

（ニ）馬家溝

乾河ヲ隔テ、新市街ノ南東ニ位シ、一見郊外住宅地ノ観アルモ、市街ノ建設未ダソノ半途ニアルハ惜ムベシ。邦人関係ノハルピン競馬場、日露協会モ此地ニアリ。

（ホ）旧ハルピン

馬家溝ニ接続シテ元ト露国兵営ノ在リシ地ニシテ、現時ハ無線電信所、支那軍隊ノ兵営、旧ハルピン駅ノ他、製粉、製油工場多ク、邦人経営ノ満州製粉株式会社工場モ亦此地ニアリ。

（ヘ）頭道街

本区ハ埠頭区ノ西隣東支鉄道組立工場ノ南方湿地ニ在リテ、別名ヲ三十六棚ト称ス。従来職工ソノ他不逞ノ徒ノ剿窟ニシテ、近来白系ニ属スル敗残者ニシテ此地ニ居ヲ構フルモノ多ク、道路ハ泥濘ニシテ一見場末ノ貧民窟タルノ観アリ。サレドモ住民中ニハ帝政時代ニ飛鳥ヲモ落セシ公爵又伯爵等ノモノアリ、大、中将等ノ将官連中モアリテ、大臣、次官等ニシテ高官ノ果テモアリテ、而メ現時ノ生活状態ヲ見ルニソノ落魄ノ極ニアリテ、従ツテ令夫人タリシ又令嬢タリシ者ハ、婦人組ノ夜陰ニ隠レテ通行人ノ袖ヲ曳クモノアリトモ聞ク。ソノ栄枯盛衰有為転変、真ニ幻ノ如ク転タ憐憫ニ勝エザルモノアリ。

ハルピンノ市中ノ建物ハ全部洋式ニシテ、2階建以上ノ煉瓦建物ソノモノ多シ。道路ハ概ネ5間以上ノ路幅ヲ有シ、2、3年前迄ハ修理ノ不充分ナルヨリ路面ノ凹凸激シク車行頗ル不快ニシテ、降雨ニ際シテハ泥濘甚ダシク通行ノ困難ヲ極メタリシガ、近来ハ角石ノ敷詰工事ヲ施シ大イニ修築ヲ行ヒシタメ、ソノ面目ヲ一新シタリ。

（ト）傅家甸

ハルビン県ノ首都ニシテ俗ニ道外ト称ス。傅家甸今日ノ如キ盛況ヲ為セシハ、僅々過去25年間即チ明治29年以後ノ事ニ属ス。而メ此長足ナル発展ハハルビン市ノ発達ニ隨伴セルモノニシテ、東支鉄道ノ敷設前ニアリテハ只漁戸散点シ、傅ト呼バレタルモノ営ミシ所ノ一旅舎兼飲食店ノアリシニ過ギザリシナリ。サレド此一旅舎ガ漁民ノ聚楽場トナリ、此ニ端ナクモ地名ノ濫腸ヲナスニ至レルモノナリ。街衢ハ江岸ニ沿ヒ、東西ニ通ゼル大街道ヲ中心ニ概ネ十字形ニ構成セラルヽナリ。

其内ノ新市街ハ規則正シク、東西南北ノ2街道ヲ中央部トシテ碁盤形ニ作ラレタル家屋ハ場末ヲ除キ概ネ洋式建築ニシテ、就中東西ニ通ズル大街ニ沿エル大商店ハ挙ツテ大厦高楼ナラザルハナク、ソノ店舗ノ装飾等モ洋式ニシテ、支那ニ於テハ確カニ上海ニ亜グノ欧風ノ一大都会タリ。此地ニハ松花江航行船舶ノ碼頭アリテ、汽船ハ横付ケセラレ、貨客ノ搭載、陸揚ゲニ頗ル便ニシテ、又隣接地区ニハ埠頭停車場モアリテ、水陸ノ運輸連絡ヲナスヲ以テソノ交通ハ頗ル便ナルガ故ニ、ソノ解氷期ニハ、黒河、呼蘭、伯都納、吉林等ノ間ニ貨客ノ往来頻繁ニシテ、熱閙ヲ極ム。

第5節　官公衙ソノ他ノ機関

（イ）日本側

総領事館、国警察所、駐在武官公館、日本居留民会、商品陳列館、商業会議所、在郷軍人会支部、日本赤十字社支部、共立病院、日本人倶楽部、尋常高等小学校、支那語学堂、日露協会、東語学堂、本願寺、同幼稚園、鮮人小学校、同幼稚園、国民、留会、正金、朝鮮龍口、ハルピン等ノ各銀行、又劇場、各種ノ組合等アリ。

（ロ）支那側

濱江道尹公署、同県公署、鉄路督弁公署、交捗局、市況管理局、高等審判庁、監獄、警察総管理所、警察庁、保安警察隊、同馬巡隊、警察衛生隊、司法隊、探訪隊、郵便局、電報局、無線電信所、各種学校、交通銀行、儲蓄銀行、金城銀行、東三省銀行、奉天興業銀行、牛花銀行等ノ諸官衙多シ。

（ハ）外国側

東支鉄道庁、同病院、同学校、同工場、商業倶楽部、市役所、農事試験場、商業会議所、中学校、女学校、商業学校、小学校、寺院、露亜銀行、極東銀行、極東猶太人学校、猶太人国民銀行、劇場（以上ハ露国側）。

英国領事館、香港上海銀行、米国領事館、花旗銀行、独乙領事館、仏国領事館、伊太利領事館、葡国領事館、瑞典領事館、波蘭代表公館、エストニヤ代表公館、白耳義領事館、丁抹領事館、ラトビヤ領事館、リトアニヤ代表公館等ノ諸館衙アリ。

第6節　商業

(1) 商業上ノ地位

ハルビン北満ニ於ケル経済上ノ中心ニ位シ、一ツハ対露貿易ノ中継地トシテ、一ツハ地方的経済ノ中心地トシテ発展シ、前者ハ東支鉄道建設ニ伴フ材料輸入ヲ端緒トシテ歩ヲ進メ、鉄道敷設ニ伴ヒ来レル移民ニ対スル物資ノ供給トナリ、欧州大戦ノ勃発スルヤ日本及米国ヨリ露国向貿易貨物輸出中継地トシテ大イニ繁盛ヲ見ルニ至ツタガ、露国ノ崩壊後一大頓挫ヲ来シタ。後者ハ露国及日本ノ満州経営及支那ノ北満ノ開発策ニ伴フ支那移民ノ増加ニヨリ、農産物ノ増収ヲ来シ併セテソノ加工業勃興シ、此等産物海外輸出旺盛トナリ、一方ニ住民ノ消費大イニ増加シ、従ツテ海外及支那雑貨ノ輸移入ノ旺ントナリ、之ガ集散地トシテ大ナル使命を有スルニ至ツタ。即チ海外輸出ニアリテハ、先ヅ極東亜伯利亜ニ食糧ノ供給ヲナシ、次イデ大豆及豆油ノ欧州ヘノ輸出、豆粕ノ日本輸出トナリ、更ニ小麦粉ノ海外輸出ヲ見、輸入ニアリテハ北満交通上ノ衝路ニアルノ関係上、北満輸入物資ノ大部分ハ一旦北市ニ入リテ後、又此地生産物ト共ニ更ニ鉄路ニヨリ、東支東西両部線共ニ南部線ノ各地ニ配給セラレ、水路呼蘭河及松花江ニヨリ、下流ハ拉哈蘇々ヨリ哈府武市ノ方面ニ、上流ハ綏化、陶頼昭方面ニマデ、又陸路ハ抹泉、海編ノ奥深クニマデ供給セラレ、黒河ニマデモ仕向ケラルヽ事ガアル。濱黒鉄道ノ一部タル呼海鉄道ハ馬車ニヨリ綏化迄ノ開通ヲ見、荒漠タル農耕未墾地方ハ漸次ニ開拓サレテ、年々出廻品ノ増加ヲ来スベキハ明瞭ナル所ニシテ、之ヲナシテ移輸入品ノ増加ヲ促進スルノデアル。

斯ク観ジ来レバ、之ガ中心市場トシテノ哈尔浜ノ位地ハ、将来ハ愈々一層ニソノ重要ノ度ヲ加フルヤ論ヲ俟タダル所ナリ。

(2) 商業機関

日本、英、仏、独、露共ニソレゾレニ商業会議所ヲ有シ、其他ニ哈尔浜総商会、浜江商会等アリ。又取引所トシテハ、浜江貨幣交易所、股份有限公司、浜江証券糧食交易所股份有限公司等ノモノアリ。

哈尔浜商品陳列館ノ其事業ヲ今下ニ述ブレバ、次ノ如シ。

(1) 日露及北満ノ商品並売買品ノ展示説明。
(2) 露国及北満地方向ノ商品改良ノ指導。
(3) 一般商取引ノ仲介及商工業者ノ紹介。
(4) 巡廻販売ノ指導。
(5) 露亜時報、周報露文官報ノ発行並ニ図書ノ供覧。
(6) 商工業ニ関スル内外ノ諸機関ト本館トノ間ニ於ケル通信印刷物ノ交換、並ビニソノ陳列品ノ貸借及譲渡等ニ関スルノ絆。
(7) 貿易及企業ニ関スル調査報告及ソノ応需。
(8) 一般ノ企業ニ関スル紹介及仲介業。
(9) 其他貿易及企業促進ニ資スベキ施設。

日本側ノ各種銀行及会社等ハ次ノ如シ。

国際運輸株式会社、株式会社哈尔浜銀行、横浜正金銀行、朝鮮銀行、株式会社正隆銀行、哈尔浜儲蓄金信託会社、東三省実業株式会社、日華露商工株式会社、東洋棉花株式会社、三菱商事株式会社、株式会社協信洋行、満州製粉株式会社、株式会社鈴木商店、三井物産株式会社、北満製油株式会社、日支合弁中東海林株式有限公司、日清製油株式会社、満蒙殖産株式会社、鴨緑江株木公司、哈尔浜土地建物株式会社、北満興業株式会社、株式会社ハルピン検番、ハルピン日々新聞株式会社、東亜煙草株式会社、東亜洋蠟株式会社、株式会社ハルピン座、株式会社ハルピン競馬場、日支合弁札免株木公司、山下汽船株式会社等ナリトス。

支那側ノ各種銀行及株式会社ハ次ノ如シ。

中国銀行支店、浙江興業銀行支店、吉林永衡官銀号、奉天儲蓄会、大同儲蓄会、浜口儲蓄会、辺業銀行、東北聯合航務局等ノモノナリトス。

此東北聯合航務局ハ東北航務局、東亜輪船公司、奉天航業公司、浜江儲蓄会、于喜亭輪船公司ヲ合併シテ東北聯合航務局ト改称シ、民国16年4月ヨリソノ営業ヲ開始セルモノデアル。

露国側及其他各国側銀行及会社ハ次ノ如シ。

（イ）万国儲蓄会社。

（ロ）エムペスピストウノフ（此ハ1923年ノ設立ニシテ其営業課目ハ、金屑、金具、水道機械附属品、家具類等ナリ）。

（ハ）ベリタス保険会社（1928年ノ設立ニシテ、営業課目ハ火炎海上保険ナリ）。

（ニ）ウエ・エム・ワエルツェウドセ商会（1904年ノ設立ニシテ、営業課目ハ飲料及ビ食糧品販売ナリトス）。

（ホ）ドロギスト商会（1905年ノ設立ニシテ、営業課目ハ医業並ビニ化学薬品販売業ナリトス）。

（ヘ）サボールナヤアプテカ商会（1924年ノ設立ニシテ、営業課目トシテハ医薬品及ビ化粧薬品等ノ類ナリ）。

（ト）チエー・バシキーロフ商会（1920年ノ設立ニシテ、営業課目ハ輸入業ナリ）。

（チ）株式会社エス・ソースキン商会（1900年ノ設立ニシテ、営業課目ハ穀類ノ輸出業トス）。

（リ）ゼッケマン商会（1924年ノ設立ニシテ、営業課目ハ欧州製品ノ輸入業並ニ卸売業トス）。

（ヌ）オルガ工業会社（1919年ノ設立ニシテ、営業課目ハ輸出入業ナリ）。

（ル）伊満シンヂケート会社（1922年ノ設立ニシテ、営業課目ハ反物及自転車ノ輸入業ナリ）。

（ヲ）穀類仲買人組合事務所（1921年ノ設立ニシテ、営業課目ハ輸出商品ノ仲買業ソノ他トス）。

（ワ）トランスポルト第一株式会社（1922年ノ設立ニシテ、営業課目ハ貿易保険業ソノ他トス）。

（カ）欧羅巴国民銀行（1923年ノ設立ニシテ、営業課目ハ銀行業務ナリ）。

（ヨ）露亜銀行（1920年ノ設立ニシテ、営業課目ハ銀行業務ナリ）。

（タ）極東銀行（1923年ノ設立ニシテ、営業課目ハ銀行業ナリ）。

（レ）極東猶太商業銀行（1922年ノ設立ニシテ、営業課目ハ各銀行業務ナリ）。

（ソ）西伯利亜商業銀行（1918年ノ設立ニシテ、営業課目ハ銀行業ナリ）。

（ツ）極東借款銀行（1922年ノ設立ニシテ、営業課目ハ銀行業ナリ）。

（ネ）花旗銀行支店（営業課目ハ銀行業）。

（ナ）米支懋業行支店（営業課目ハ銀行業）。

（ラ）英国ノ食糧品輸出会社（此社ノ設立ハ1913年ニ係リ、獣肉、鳥肉、各種腸詰類製品ノ販売業ヲ主トシテ、其営業課目トスル世界ニ5、6個所ノ支店ヲ有シ、冷蔵船24隻ヲ有セリ）。

（3）通貨

哈尔浜ニ於ケル通貨ハ露国ノ勢力ノ旺盛ナリシ大正7年ノ頃マデハ主トシテ露貨留紙幣ニシテ、ソノ流通範囲ハ頗ル広ク、ソノ諸取引ハ殆ンド露貨建ニヨリテ行ハレ、当時市場ノ流通高4千万留ト称セラレタ。

露国ノ革命後ハロマノフ紙幣、シベリスキー紙幣、ケレンスキー紙幣、大蔵証券及ビ同利札、ホルソット紙幣等相並ビテ流通セシガ、大正9年5月以降東支鉄道ガ金留本位ヲ実施セシヨリ、金貨ノ流通ハ再現シソノ現流通高ハ不明ナルモ、5万留ヲ即時ニ今日調達シウルノ好況ヲ呈シタガ、然ルニ大正7年以来躍進シ来ツタ金券及支那貨ノ流通ハ漸次ニ増大シ来リ、尓後ノ市場ハ日支両国貨幣ノ流通ニ委シツヽアッタガ、今ソノ流通範囲ヲ見ルニ前者ハ主トシテ哈尔浜市及外国人間ニ、後者ハ支那街及支那人間ニ通用セラレタ。

（イ）日本通貨

哈尔浜於ケル日本通貨ハ鮮銀金券及小額銀銅貨デアッテ、就中鮮銀券ノ市場ヘノ流通高ハ約500万円ニ達シ居リ、日本通貨ノ北満地方ニ普及スルニ至ッタ其ノ経路トシテハ次ノ如クデアル。

（A）大正5年以前ノハルピンニ於ケル通貨ハ露貨全盛ヲ極メ、日貨ノ金勘定ヲ見ナカッタ。

（B）大正5年6月、正金銀行ガソノ支店ヲシテ日貨ノ相場ヲ建テ、日貨流通ノ機運ヲ開イタ。

（C）大正6年9月、朝鮮銀行ガ金券発行権ヲ有スルニ至リ、ハルピン支店ニ於テ金勘定ニ座ヲ開キ金券ノ流通ヲ促進セシメタ。

（D）大正７年７月、我軍ノ西伯利亜派遣ニヨリ軍票ヲ発行セシモ、ソノ流通ハ円満ナラザルモノガアッタ。一方将来金券ノ流通ヲ拡大セントノ企図ヲ抱キタル当時ノ斉々哈尔站倉庫長ガ、多大ノ荷馬車ノ賃金及物品代ノ支払ヒニ当リ、時ノ黒龍督軍ニ対スル交渉巧妙ヲ極メ、遂ニ同督軍ヲシテ金券ノ頗ル信用アル旨ヲ布告セシメタルニソノ端ヲ発シテ、遂ニ現時ノ如ク金券流通ノ隆盛ヲ見ルニ至ツタノデアル。

（E）大正８年４月、オムスク政府ガケレンスキー紙幣ノ廃止ヲ宣言シタルタメ㉟市場ハ一時恐慌ヲ来シ、露貨ハ之ガ為ニ愈々大暴落ヲ来スニ至リ、商取引ハ不能トナリ其標準確立ノ必要上日本貨ヲ以テ次第ニ重要視シ来リ。従ッテ日本通貨躍進ノ機運ヲ惹起シ来リタルノ次第デアル。

（F）大正８年６月、東支鉄道ハソノ運貨ヲ金留建トセシタメ、大商店タル秋林ヲ初メ続々トシテ金貨相場ニ改正スルニ至リ、民国15年来マデハ市内ノ外国商人ハ総ベテ白貨ヲ採用スルニ至ッタ。大体ニ於テ右ノ如キ趨勢ヲ以テ金券ノ進出ヲ見ルニ至ッタノデアル。

（ロ）支那側ノ通貨

ハルピンニ於ケル支那側ノ通貨ニハ大洋銀、大洋票、吉黒両省官帖アリ。其他ニ元宝銀アリテ一錠ノ標準量ハ53両５銭デアルガ、市中ニハ全クニソノ流通ヲ見ナイ。

大洋銀ニハ袁世凱弗、北京票アリ。黒銀及香港弗ハ殆ンドソノ通用ヲ見ナイ。大洋銀票ハ中国、交通、東三省及辺業銀行並ニ黒龍江広信公司ノ発行ニ係リ、ソノ種類ハ10元、５元、１元、50仙、20仙、10仙、５仙ノ７種アリテ、而メソノ券面ニ「哈尔浜」ノ文字ガアル。今当地ニ於ケル大洋券流通ノ経路ヲ見ルニ、元来留市場デアッタ哈尔浜ハ、露国ノ勢力ノ衰ヘ殊ニ東支鉄道ノ同盟罷業毎ニ、支那官憲ハソノ警察権ヲ回収シ司法権ヲ収メ来リ、次イデ通貨政策に手ヲ延バセシ結果ハ漸クソノ勢力ヲ伸暢スル事ガ出来タノデアル。即チ大正８年９月、中国、交通ノ両銀行ハ初トテ大洋券ヲ発行シ、同９年３月之ヲ大洋銀ニ対スルノ兌換券デアルトノ旨ヲ声明スルト共ニ、多少ヲ問ハズソノ兌換ヲ開始シテ其信用ヲ博セントシタ。更ニ同年10月東三省銀行ノ設立ト共ニ、同行ニモ該券ノ発行権ヲ附与シタ。加フルニ呉俊陞ガ黒龍省督軍トナルニ及ビ、同省ノ広信公司ニモ亦大洋券ノ発行ヲ許可スル等、鋭意勢力ノ扶植ニ力ヲ用フル所ガアッタ。又東支鉄道ノ運賃建値ノ如キモ金留ヲ建値トセル洋銀ヲ以テスルノ規定デアルガ、事実ハ大洋券ソノ侭受入ルヽ状態デアッタ。

民国15年ノ秋、奉天ノ官辺ニ於テ軍費捻出ノタメ紙幣ノ濫発ヲ敢行シ、辺業銀行ニ於テ200万元、広信公司ニ100万元、東三省銀行ニテハ無慮1,000万元ト称セラレ、忽チニシテ大洋票の暴落トナリタレバ、支那側官辺ニ於テハ之ガ市価ノ維持策トシテ、或ハ現銀ノ兌換ヲＴ元ニ低下シ、或ハ硬貨ノ市場外ヘノ持出ヲ禁止スル等ソノ他凡ユル手段ヲ弄シテ、遂ニ金円排斥ノ暴挙ニ出デ、経済界ニ大問題ヲ惹起セル事ハ世人ノ耳目ニ新ナル所デアル。

又吉林官帖及黒龍江官帖ハ支那人間ノ取引ニ限ラレ、外人間ニハソノ通用ヲ見ナイ。其種類ハ100吊、50吊、10吊、１吊ノ５種デアル。前者ハ吉林永衡官銀行、後者ハ黒龍江、広信公司ノ発行スル所デアル。

第７節　工業一般

哈尔浜ハ元来燃料不廉、従ッテ動力費割高トナリ、水質ノ不良ノ為ニソノ豊富ナル原料ノ供給地デアリ、又運輸交通ノ便アリ。直接消費地デアルニ不拘、工業地トシテノ発展ヲナサズ、未ダソノ幼稚ノ域ヲ脱シナイ。今日多少ニ認メラル、主要工業ハ、製粉、油房、醸造ノ３ツニシテ、此他ニ皮革、製材、染色、織布、石鹸、製糖等アルモ、之等ハ余リ大規模ノモノデモナイ。

今此ニ主要工業ノ各個夫々ニツキテ概説ヲ加フ

ルニ、次ノ如シ。

(1) 製粉業

(イ) 沿革

哈尔浜ニ於ケル機械製粉業ハ、他ノ諸工業ニ先立チテ疾クニ設立セラレ、1900年ニハ已ニ松花江岸ニソノ煙ヲ挙ゲタ。其後明治35、6年頃ニハ露人ガ日露戦争ノ戦勝ヲ夢見テ建テタル個人会社ト、露軍人ノ麦粉ノ供給ヲ目的トシテ建テラレタル官設会社トノ2種ガアリテ、10余ノ工場数トナッタ。ソレガ露国ノ敗戦ニヨリテ休止又ハ閉鎖スルモノ続出シ、殆ンド全滅ノ状体トナリ、明治44年頃迄ソノ衰微ノ状体ヲ続ケタルモ、尓来哈尔浜ハ北満ニ於ケル経済的ノ中心地トナリ、豊富ナル北満ノ小麦ヲ原料トセル斯業ハ勃興シ、ソノ間幾多ノ波瀾曲折ノアリシニ不拘、大正元年ニハ11工場ニテ、580万布度ノ麦粉ヲ生産スルニ至ッタ。続イテ欧州ノ大戦トナリ漸次発達シ、大正8年ノ3月末ニハ17工場ヲ算シ、ソノ後半期ヨリハ大正9年前半期ニ亘リ麦粉ノ需要ハ頓ニ増加シ、殊ニソノ価格ハ騰貴シテ採等ノ引合ヒハ良好トナリ、海外ニマデ輸出スルノ好況ヲ呈シ、斯業ハ益々隆盛トナリ遂ニソノ工場数ハ23個ニ達シタ。カクテハ各工場共ソノ全能力ヲ挙ゲテ生産ニ従事シ、前途洋々タルモノアリシガ其後引続キ北満小麦ノ不作、米国粉ノ南満侵入等ニ禍セラレ、斯業ノ不振ヲ極メ休業スルモノ続出シ、最近ニ於テハ時々ソノ繰業ヲナシウルモノ僅カニ15工場ニ過ギズシテ、其他ハ殆ンド閉鎖ノ状態デアル。而メ工場過多、資金難、原料高等ノタメ一層ノ悲境ニ陥リ、今日ニ至ッテ居ル。

(ロ) 工場ノ現況

哈尔浜ニ於ケル製粉工場ハ現在23工場ニシテ、東支沿線ノ一帯ニ於ケル37工場中ニテ其大部分ハ当地ニ置カレテアル。前述セルガ如ク、現在財界ノ不況ノ折柄ソノ大部分ハ作業ヲ休シ居ルモ、ソノ製造力ハ不明ノ分3軒ヲ除キテ、一昼夜ニ94,300布度ノ多キニ達シテ居ルノデアル。

(2) 油房業

(イ) 沿革

哈尔浜ニ於ケル油房工業ハ遥カニ製粉業ニ後レテ発達シ、近代工業的ニ経営セラルヽニ至ッタノハ日露戦役後ニシテ、明治41年頃カラ始ッタノデアル。而カモ当時ノ油房ハ旧式ノモノデ見ルベキ程ノモノデハナカッタ。新式機械油房ノ勃興シ始メタノハ、大正元年頃カラデアル。大正2年ニハ順和裕、盛泰ノ2工場ノ設立ヲ見、大正3年ニハ裕太、東亜、同4年ニハ徳義盛、義昌信、元吉、隆徳、同発隆、奉泰義、「カハルキン」、双興、新泰大順昌ノ10個ノ工場建テラレシ、大正6年2月1日現在に於テハ工場数18個、その資本190万留デ、1日ノ原料消化高ハ63,060布度、製粕高34,400枚、製油高2,428度ヲ示シタ。此等ノ油房発展ハ欧戦ノ好影響ヲ受ケシニ依ル。

(3) 醸造業

哈尔浜ニ於ケル醸造工業ノ主ナルモノハ、「ウォッカ」、「ビール」、「スピリット」デアル。全能力ハ約50万ウェードロデアルガ、現在は17万乃至ハ18万ウェドロノ生産ヲナシテルニ過ギナイ。内日本側トシテハ、高田ボロヂン酒精工場及加藤醤油醸造公司ガアル。

(イ) 醸造業

酒精ハ露人ノ愛用スル「ウォッカ」ノ原料並ニ、一般ノ工業用及家庭用トシテソノ需要ノ多キタメ、製粉、製油工場ト共ニソノ工場ハ疾ク開設セラレ、1900年ニハ已ニ「ヂャイコフ」氏ノ手ニヨリテソノ設立ヲ見タガ、尓来人口ノ増加ニ伴ヒソノ数ヲ増加シ、欧州大戦前ニハ多数ノ工場ガ併立サレ、ソノ事業ハ相当ノ発展ヲ見タルモ、開戦ト共ニ酒精ノ価格ハ下落シ、為メニ小工場ハ倒産、閉鎖ノ已ムナキニ至リ、加フルニ財界ノ不況トナリ、極東西伯利亜ノ秩序ノ紊乱、東支鉄道運賃高等ノ関係上、現在ニテハ僅カニソノ残余セル大工場ガ漸クニ操業ヲ維続シテヰルノニスギナイノデアル。

(ロ)「ウォッカ」工場

「ウォッカ」製造工場ハ現在13個ニシテ、邦人

経営ノモノ1、ソノ他ハ凡ベテ露人経営ノモノデアル。邦人経営ノモノハ前記「ボロヂン」高田酒精工場ノ兼営ニ係リ、哈市及東支鉄道沿線一帯ニ供給シテ居ルノデアル。

(ハ) 麦酒工場

哈市ニ於ケル麦酒製造工業場ハ5個所アルノ他、何レモ生産品、ソノ品質ハ下級ノモノニシテ、高級ノモノハ日本及独乙等ヨリ年々貨車ニテ1万布度内外ノモノガ輸入サレル。当地ノ製品ハソノ品質ハ上等ナラズト雖モ、格安ノ値段ヲ以テ供給サルヽガ為一般ニ需要サレ、就中支那人向トシテ可成リノ売行ヲ示シ、殊ニ東支鉄道ノ沿線及田舎地方ニ於テハ殆ンド皆之ヲ需要シテヰル。又之ガ原料トシテノ麦ハ当地方産ノモノヲ使用シ、ソノ葱市ハ一部ガ独乙ヨリ輸入サルヽノ他、悉ク米国品ヲ使用シテヰル。

(ニ) 醤油醸造業

哈尔浜ニ於ケル日本醤油製造工場ハ、加藤公司1軒ノミデアル。該公司ハ明治42年ノ設立ニシテ、ソノ開業当時ノ同業者ハ支那人1名ノミデアッタガ、ソノ後日本人ニシテ斯業ヲ開始セルモノ1名アリシモ、不引合ノタメニ幾何モナク閉店ヲナシ、大正5年迄ハ大ナル変化モナク、同年ニ日貨ノ排斥ガアッテ支那醤油ノ需要激増シ、同品製造販売ノ利益大ナルタメ、俄カニ支那人間ニ企業者増加シ、ソノ数約40軒ニ上リシガ、其後財界ノ不況、金融硬塞ノタメ万豊ヲ始メ、ソノ他倒産閉店セルモノ続出シテ、現在ハ約20軒ヲ等スルモ、何レモソノ売行キノ不振ナル上ニ競争ヲ事トセルタメソノ業績ハ挙ラズ。此秋ニ当リ加藤公司ハ専ラ意ヲ品質ノ改良ニ注ギ、孤軍奮闘シ来リ、最近ニ至リテハ支那人ノ嗜好ガ品質本位ニ推移シ来リタルニ伴ヒ、ソノ成果ヲ認メラルヽモノアルニ至リ、相当ノ成績ヲ収メテ居ルノデアル。

第4章　呼蘭

第1節　位置

呼蘭河ノ左河ニ位シ、ハルピンヨリ陸路60支里ニシテ、水路160支里ニ位シ、綏化、海編、巴彦、東支鉄道対青山駅ニ通ズル道路ノ起点ヲナシ、所謂四通八達ノ要衝ニ当ッテ居ル。

第2節　沿革

咸豊年間ノ開拓ニ係リ元ト副都統モ置カレシガ、光緒31年（明治38年）呼蘭府ノ新設セラルヽヤ之ヲ撤廃シ、一般ノ行政ハ知事ノ掌ル所トナリ、カクテハ現在ノ県治ヲ見ルニ至レリ。往昔ハ金朝ノ地ニシテ、女真入城ソノ他ノ古城蹟ガアリ、附近一帯ハ豊饒ナル平地ニシテ水運ノ便ヲ有シ、北部満州ニ於テ最モ早ク人文ノ開拓セラレタルノ地デアル。

前清ノ初期ニ於テハ専ラ満族ノ農耕ヲ許シタルモ、ソノ天然ノ富源ヲ慕ヒ漢人ノ私力ニ来リ耕スモノ多ク、漢満人亦ソノ治者ノ地位ニ狎レ漸ク怠惰ニ流レタルニ伴ヒ、漢人ノ経済的ノ勢力ハ愈々鞏固トナルニ及ビ、満朝ハ遂ニソノ禁ヲ釈イテ、従ッテソノ人口ハイヨイヨ稠密ヲ加ヘ、此無限ノ宝庫ハ日ト共ニ開カレ、露国ガ哈尔浜ノ地ヲ経営スルニ及ビ、対岸ノ一帯ニ更ニソノ経済上ノ価値ヲ向上スルニ当リ、北満有数ノ地トナリ。

第3節　戸口

人口ハ約45,000人ヲ等セリ。

第4節　市街ノ状況

市街ハ南北約7支里、東西30支里ニ及ビ、西南ノ一帯ハ呼蘭河ニ臨ミ、周囲ニ城壁ハナク只牌楼ノミ存ス。ソノ主ナル街衢ハ東西南北ノ4大街ニシテ、就中南北大街ハ最モ熱闘ノ地区ニシテ、大商店櫛比シ商業ハ頗ル殷盛ヲ極メタリ。近時ハ奥地ノ開発ニ伴ヒ、綏化・海倫ニヤ、ソノ繁華ヲ奪ハレ、加フルニ従来北方ノ一帯ヨリ蒐集セシ穀類ハ、直接ニ安達、溝対青山等ニ搬出セラルヽモノ漸増セルノ関係上、商業トシテ重要ナルノ程度ハ漸クニ低下スルノ傾向ニアリ。

第5節　官公衙ソノ他ノ機関

呼蘭県公署、地方審判庁、地方検察庁、遊擊隊、県警察所、県教育局、協領衙門、地方捐務所、黒龍江省呼蘭禁煙分局、菸酒事務局、硝磺総所、呼蘭徴収局、県実業局、基督教会、郵政局、電話局、電報局、県図書館、通俗講習所、蘭陽倶楽部等アリ。

第6節　産物

当地方一帯ニ於ケル主ナル産物ハ次ノ如シ。陸稲、大豆、小麦、大麦、高粱、粟、玉蜀黍、雑穀、豆油、麻油、豆粕、麦粉、焼酒等トス。

第7節　商業

市街ノ家屋ハ厳重ナル防衛的様式ノ建築多ク、通路ニ面シテハ高キ煉瓦屏ヲ設ケ中ハ広キ院子ニシテ、銀行、質店、兌換舗、綢緞舗等ガ雑居シテヰル。

東西大街ト南北大街トノ十字路附近ハ最モ繁華ニシテ、各金融機関、商務会、指務局、稽査所、徴収局、黒龍江省菸酒局、電報局、電話局、郵政局、各医院、客桟、雑貨店等、人目ニツク代表的ノモノハ悉ク此処ニ集ッテヰル。

北大街ニハ主トシテ綢緞、雑貨ノ各種商店ガ集中シ、西大街ニハ浴場、妓楼、料理店、食料雑貨店、野菜市場等ニテ大部分ヲ占メ、公園ガアリ、東大街ニハ県公署ヲ始メトシテ県警察署、基督会、商務会、農務会等ノ官公衙及ビ田舎向ノ山貨店及住宅地ガ多イ。又南大街ハ各種の金融機関、客桟、官公衙及主ナル綢緞雑貨舗、銭荘、貴金属店等ガ集中シテヰル。

次ニ輸出入商品ニツキテ之ヲ見ルニ、穀物ハ従来、康家井、石人城子、興隆鎮、綏化、慶城、海倫等ノ処ハ悉ク当地ニ集散或ハ通過シ、哈市ニ輸送サレタルモノニシテ春ト夏季ニ於テハ戎克ニヨリ、冬期間ハ馬車輸送ノ方法ニヨリテ20数軒ノ粮桟アリ。又県送店トシテハ福成興、発祥泰、福祥公等ソノ他大ナルモノ数軒アリテ、冬季出廻季ニハ非常ナル殷盛ヲ極メタルモ、民国15年呼海鉄路開通以来ハ急激ナル衰微ヲ来シ、取引ハ閑静トナッタ。即チ前記各地ヨリ出廻リタル穀物ハ、悉ク呼海鉄道ノ最寄リノ各駅ニ搬出サレテ輸送サルヽニ至リ、只僅カニ近郷一圏ノ貨物ガ集散サルヽニ至リタルタメ、20数軒ノ粮桟ハ殆ンド全部閉鎖同様トナリ、同クハ興隆鎮並ニ綏化方面ヘ移住スルニ至ッタノデアル。従ッテ東永茂、東永徳ノ2大客桟ハ破産し、ソノ他ノ方面ニ於テモ業務を縮少セルモノ劣ラズ。又輸入方面ニツイテ之ヲ見ルニ、呼海鉄道ガ未ダ建設時代ニ属シ、万端ノ設備整ハザルタメ奥地行商品ノ輸入トシテハ、輸出ノ如ク急激ナル変化ヲ来サヾルモ多少ハ減少ヲ来シタレバ、将来ソノ設備ノ完成ト共ニ鉄道ヲ利用スルモノ多ク、ソノ漸減ヲ予想サレテル。而メ之等輸入雑貨類トシテハ日本品最モ多ク、支那品ト殆ンド天下ヲ二分セルノ観アリ。其他トシテハ英米独仏品等ガ僅カ斗リアルノミデアル。

日本品トシテハ綿織物類ガ最モ多ク、琺瑯鉄器、窯業製品、石鹸類及ソノ他小間物類等之ニ次ギ、其他皮革製品、医薬品類、味ノ素、食糧雑貨、金物類、莫大小、タオル類、ソノ他雑貨ニシテ何レノ店舗ニモ之ヲ備ヘザルハナク、市中ノ物価ハハルピン及ソノ他ノ地方ニ比シ、食糧品ハ原料品ト共ニ安価ニシテ、缶詰、乾物、呉服類、ソノ他雑貨類ハ総ベテ意外ノ高価ニアルノデアル。

第8節　工業

呼蘭ニ於ケル工業トシテハ、製粉会社ハ発電所1、焼鍋8、油房12軒アルノミデアル。

其他当知ニハ埠頭アリテ、日々ニハルピントノ間ニ小蒸気船ノ往復アリ。又常ニ戎克60隻乃至70隻位繋留スルモノアリテ、上下流ノ各地ヘノ輸送ニ従事シ、ソノ解氷期間ニハ水運ハ盛トナル。当知ニハ公園アリ、支那式設備ノモノトシテハ良好ニシテ四時緑ヲ絶エズ、日々ニ興業物モアリテ群集雑踏セリ。

第5章　木蘭

松花江ノ左岸新甸ヨリ30支里、哈尔浜ヨリ31支里ニアリ、地名ヲ索羅章口ト称シ元ト巴彦州ノ地域ニ属セルモノナリシガ、光緒34年石頭河以東ノ地ヲ割イテ新ニ木蘭県ヲ設ケ、同時ニ県公署ヲ石頭河子ヨリ此地ニ移転シタルモノデアル。戸数ハ約1,500、人口ハ約10,000ト称セラルヽガ、船上ヨリ見タル所デハ余リニ大キナ町デハナク、新甸ノ方ガ遥カニ大キクモアルシ又活気モアル様デ、大豆、小麦等ノ農産物ノ輸出港デアル。

第6章　三姓

第1節　位置

哈尔浜ヲ距ル事水路650支里、同江トハルピントノ殆ンド中間寧古塔ヨリ陸路400露里、牡丹江ト松花江トノ合流点ニシテ、松花江ノ右岸ニ在ルノデアル。

陸路ニヨリ	哈尔浜ヘ	190哩
	寧古塔ヘ	120〃
	勃利県ヘ	55〃
	密山県ヘ	223〃
	佳木斯　南路	95〃
	北路	88〃
水路ニヨリ	哈尔浜ヘ	212哩
	ペトナヘ	385〃
	新甸ヘ	110〃
	湯源ヘ	33〃
	佳木斯ヘ	95〃
	樺川ヘ	70〃
	富錦ヘ	172〃
	同江ヘ	218〃
	ハヾロフスクヘ	389〃

三姓ノ市街ハ如上ノ如キ地点ニアリ、松花江々岸ニヨリ約3支里ノ地ヨリ牡丹江ノ右岸ニ沿ヒ、長サ3露里、幅4露里ノ歪形地ヲ占メ、松花江水面上約10呎乃至30呎ノ粘土砂ノ沖積層ヨリ組成セラレタル平原上ニアル。而モ松花江及牡丹江ガ洪水ノ場合ハ此附近一帯ヲ浸シ、ソノ低キ部分ハ殆ンド年々ニ浸水シ、又処々ニ溜水多ク且ツ地質ガ粘力ノ強キタメ、市街ハ頗ル不潔ヲ極ム。

第2節　沿革

依蘭県城ハ昔時ハ特殊ノ部落民トシテ、一般ノ住民ヨリ動物視セラレ見下ゲラレ、天明ノ光沢ニ浴スル事ノ出来ナイ遠子族ノ住ンデ居タ処デ、ソノ種族ノ「スヤアラケ」、「イケル」及「フシトリ」ノ3族統治ノ中心点デアッタガ、通常ハ三姓ト称シ又依蘭哈達トモ云フ。依蘭哈達ハ満州語デヤハリ「三ツノ姓」ト意味セラレテヰルノデアル。

松花江岸デハ最初ニ開拓サレタ処デ、依蘭県ノ首市トシテ三姓ノ市街設置サレタノハ1716年ノ事デ、前之康熙54年ニ此地ニ城ヲ築イテ駐防兵ヲ置キ、協領ヲシテ之ヲ統御セシメタルニ始マル。ソノ以前清ノ始メニハ地方ノ族長ヲ三姓管領トシテ統治セシメタノニ過ギナカッタノデアル。雍正10年ニハ新タニ設ケラレタ副都統ノ駐在地トナリ、光緒8年ニ三姓丁ニ改メラレ、31年ニ依蘭府トナリ、宣統元年沿域ノ南境一部ヲ方正県ニ分割シ、民国2年ニ依蘭県ト改称サレタノデアル。

光緒31年日清条約ニヨリ通商地トシテ開放サレ、統治機関トシテ宣統元年東西路道ヲ設置シタノデアルガ、民国3年依蘭道ニ改メ、依蘭、勃利、同江、密山、虎林、綏遠、樺川、富錦、方正、穆稜、宝清ノ12県ヲ管轄スルニ至ッタノデアル。

第3節　戸口

戸数ハ約4,600戸デ、人口は36,000人ヲ越ヘ、依蘭道尹公署ヲ始メ各種行政機関ノ所在地デアッテ、松花江ノ沿岸有数ノ殷盛ナル所ノ一市街デアル。

第4節　市街ノ状況

市街ハ南北ニ貫ク大街ト之ヲ東西ニ貫ク2条ノ大街ヲ幹線トシテ、ソノ他之ニ対シテ縦横セル小街ヲ以テ街衢ヲ形成シテヰル。大街ハ幅6、7間

ヲ有シ、街上ノ4個処ニ牌楼ヲ建テ両側ニハ排水溝ヲ設ケ、田舎ノ市街トシテハ比較的ニ整頓セルモ、夏季降雨ノ際ハ泥濘膝ヲ没スルノ様ナリ。建築物ヤ市街ノ発達ハ比較的近年ニアリ、一面諸官公衙ノ所在地デアルダケニ、概シテソノ規模ハ大デアル。又市街ノ一帯ニカケ家屋乃至ハ、塀等ガ莫伽々々シキ程豊富ニ材木ヲ使用シテ居ルガ、之ハ牡丹江ノ上流ヨリ流レ来リタル筏、或ハ貨物積載シ来リタル舟ヲ帰リガケニ二束三文ニテ当地ニ売却シテ行クタメ、非常ニ安価ナ材木ヲカク豊富ニ使用出来ルノデアル。

当地ハ日清通商条約ニヨリ、他ノ16個処ト共ニ之ヲ解放シテ、万国共通ノ商業地トナッタノデアル。埠頭ハ松花江岸ニシテ、哈尔浜ヨリ320支露里ノ地点ニシテ、緩傾斜ノ江岸ヲ利用シテヰル。而メ埠頭ノ水底ハ礫石ニシテ遠浅ナルタメ、船舶ノ繋留ニ不便ニシテ、江岸ヨリ70呎乃至140呎ノ処ニ停船スル。而メソノ水深ハ約4尺デアル。

第5節　官公衙ソノ他ノ機関

鎮守使公署、第九旅司令部、依蘭道殷公署、高等審検分庁、依蘭県公署、陸軍九十六団部、陸軍騎兵営、三姓江関、三姓商埠局、三姓協領公署、依蘭税捐局、依蘭官銀号、依蘭警察所、三姓電報局、三姓電話局、三姓郵政局、三姓硝磺局、依蘭木石税局、依蘭県実業局、印花税弁事所、保衛団事務所、依蘭県教育局、東北航務局、師範学校、依蘭県財務所。

第6節　産物

此地ノ主ナル産物ハ、大豆、小豆、高粱、粟、葉煙草、麻、毛皮、木材、魚類、真珠及ビ砂金ナリトス。

第7節　商業

三姓ニ於ケル商業上ノ地位トシテハ、此土地特産物タル大豆ノ輸出ヲ中心トシテ、之ニ準ジテ諸雑貨類ノ輸入供給ノ相当ニ盛ナルモノアリ。松花江ノ沿岸ニ於ケル有数ナル商業都市トシテ知ラレテヰルガ、財界ノ好況当時ヲ絶頂トシテ、最近ニ於テハ年額市勢衰微ノ状態ニアリ、而メ市中到ル処ニ空屋多ク、市中ノ目貫キノ場処ト称セラレテ居ル城内ノ大通リニサヘモ、空屋ガ発見セラルヽ程ノ状態ニ陥ッテヰル。ソノ原因トシテハ、1．埠頭ノ移転、2．税関ノ設置、3．馬賊ノ横行等デアッテ、1ノ埠頭ハ以前市街ノ西南ニ続イテ牡丹江ノ江岸ニアッタモノガ、土砂ノタメニ年々水深ガ浅クナリ、船舶ノ繋留ニ不便ヲ感ジ来タリシタメ、市街城内ヨリ約3支里ノ北方ニ当ル松花江岸ニ移シタ為、総ベテガ不便ヲ感ズルニ至ッタモノデアル。

嘗テ此税関ガ無カッタ当時ハ、船舶ノ着埠ト同時ニ貨物ノ積卸シガ自由デアッタガ、税関ノ設置以来ハ、日曜祭日ニハ取扱ハザルノミアラズ時間外ノ受付ヲモナサズ。且ツ輸出貨物ニ対シテハ当地ニ於テ納税スル事トナリ、而カモ金融機関ノ不便ト交通ノ不便ナルトニヨリテ、一層ニ商人ノ受ケタル打撃ハ甚大ナルモノアリテ、従ッテ大豆等ノ特産物ヲ初メトシテ、其ノ他ノ輸出貨物ハ漸次、佳木斯、樺川及呼錦等ノ自由地ニ奪ハルヽニ至ッタモノデアル。

第8節　輸出

輸出貨物ハ大豆ガソノ大部分ヲ占メ、全部夏季ニ船ニヨリテハルピンニ輸送セラレ、哈市ニ於テハ川豆ト称シ年々数十万噸ニ達シ、多大ノ勢力ヲ有シテ居ル。

次ニ獣皮、木材、薬材、葺等デアルガ、獣皮トシテハ、栗鼠、貂、獺、狐、狸、貉ニシテ、三姓税関ノ調ベニヨレバ、民国初年ノ当時ニ於テ年額ハ約200万留ニ達シタガ、之等モ前記ノ如クニ佳木斯、樺川ニ奪ハレ、最近ノ出廻リハ激減シタノデアル。木材ハ牡丹江上流ノ産デ非常ニ豊富デアルガ、下流ノ地方ニソノ需要ナキト、松花江ヲ遡航シテ哈尔浜ニ輸送スルニハソノ経費ガ嵩キ為、結局ハ現在ノ輸出ハ盛ナラズトナス。

第9節　輸入

輸入商品トシテハ綿花、綿織物、塩、石油、砂糖、煙草、綢緞、金物類、麻袋、陶磁器、茶、硝子製品、燐寸、蠟燭、農具ソノ他雑貨類ノ各種ノモノデアル。

果物類ハ林檎並ニ蜜柑ガ日本及朝鮮物デアル他、多クハ支那品ニシテ奉天、天津、芝罘ヨリ哈市ヲ経由シテ来ル。

日本品ノ地位ハ全市場ノ約4割以上ヲ占メ、欧戦ノ当時ニ比セバ激減ノ形デアルガ、尚ホソノ品質ハ支那品等ニ比シテ比較的ニ良好デ、ソノ価格ガ割安ナルタメ案外ニ評判良ク、ソノ主ナルモノヲ挙グレバ即チ次ノ如ントス。

綿布、綿糸布製品、莫大小類、味ノ素、角砂糖、靴紐、石鹸、アルミ製品、石鹸箱、歯磨、鏡、琺瑯鉄器、医薬品、仁丹、陶磁器、硝子製品、歯刷子、ソノ他小間物類各種トス。

第10節　工業

三姓ノ工業トシテハ別ニ特記スベキ程ノモノナシ。只地方ノ物産ニ加工シテ土地ノ需要ニ供スル程ノモノニシテ、ソノ主ナルモノニハ、焼鍋2、製粉16、油房16、銀細工商4、位ノモノナリ。

焼鍋　此ハソノ規模ヤヽ大ニシテ、県内生産穀類ノ内約4万石内外ノ原料ヲ消費シテ、其製品ノ大部分ハ市街及地方ノ需要ニ充チタルノ他、一部ハ松花江下流地方ニ輸出セリ。

油房　機器油房トシテハ只1軒ナルモ、ソノ他粮桟、当舗ノ兼業ニ係ル小規模ノモノ十数個所アリ。地方ノ需要ヲ満タシ、余リタルモノガ哈尔浜方面ニ輸出サル。

製粉　コハ何レモソノ規模小ニシテ殆ンド自給自足ノ地位ニアルガ、時トシテハ哈市ヨリノ輸入ヲ見ル。

第11節　金融事情

三姓ニ於ケル金融機関トシテハ、吉林永衡官銀号、万国儲蓄会ノ二ツアルノミデ、万国儲蓄会ハ最近ノ開設ニ係リ、未ダ何等ノ活動ヲモナシ居ラズ、永衡官銀号モ只僅カニ預金ト貸出ヲ行フ位ノモノニシテ、殆ンド金融機関トシテノ能力ヲ有シ居ラズ。従ッテ特産商又ハソノ他ノ商人ハ自家ニ現金ヲ備フルカ、或ハ銭荘ニテ金融ノ途ヲ講ジ、又彼等ノ輸出スル特産物ハソノ取引先タル哈市ニ於テ、輸入ノ雑貨類ト物々交換的ノ取引決済ヲ行フ他、銭荘及郵便局ニ於テ為替、送金等ヲ行ヒ又稀ニハ現金ノ輸送ヲモ行フ事アリ。通貨トシテハ哈尔浜大洋票、吉林官帖デアル。数年前迄ハ、銭舗、当舗ソノ他地方ノ商売ニ於テ自ラノ信用ヲ倚シテ任意ニ私帖ヲ発行シ、一時市場ハ混乱ノ状態ニ陥リタルモ現在ハ全部回収セラレ、一般市中ニ於テハ吉林官帖ヲ多ク使用シテ居ル。

第12節　交通

夏季ハ水路ニヨリ哈尔浜ヨリ下航2日、哈尔浜ヘハ遡航4日ヲ要ス。ソノ他牡丹江ニヨリテ寧古塔ニ通ズルガ、牡丹江ハソノ流水ガ強イノデ遡航ハ困難デアル。又松花江三姓ノ上流ニ延長25露里ニ亘ル有名ナル浅瀬ガアル。義和団事件ノ際露国ガ攻メテ来ルノヲ阻止スルガ為ニ、石船ヲ幾隻モ此処ニ沈メタノデソノ後幾度カ浚渫ヲシタノデアルガ、漸ク船ノ通航シウルノ間ノミ開鑿シ得タガ、ソレデモ甚ダ浅イノデソノ水深ガ標準トナッテ特ニ監視処ヲ置キ、三呎以下ナルノ場合ハ何時デモ汽船ノ航行ヲ中止スル。コハ航行業者ノ最モ頭痛ノ種トスル所デアル。又三姓ノ埠頭ハ比較的ニ浅イノデ、船ガ江ノ中央ニ停ッテボートヤ小舟デ連絡ヲトル事ガ多イ。冬ニナルト哈尔浜ヨリ自動車モ通ヒ、富錦マデ往復シ得ラル。寧古塔街道ニハ鉄道敷設ノ計画ハアルガ、ソレガ竣成シテ寧古塔ヲコエテ吉林ニ連絡スル様ニナルト、松花江岸ノ大豆、所謂河豆ハ此地ヲ経テ吉林ニ輸送セラルヽカラ、ソノ積換地トシテ発展ノ余地モアルガ、現状ノ侭デハ佳木斯ヤ富錦ニソノ繁栄ヲ奪ハレルノデアラウ。

第13節　在留邦人ノ状況

当地ノ開埠地トシテ開放セラレアル部分ハ、埠頭ヨリ城内ニ到ル間ノ淋シイ畑地デアル。而カモ三姓ハヨク馬賊ノ目標トナル所デ、夜ハピタリト城門ヲ閉メル程ナノデ、商売モ何モ出来ヌカラ、在留日本人ハ城内ノ方ニ支那人ト雑居シテヰル。嘗テハ劇場、賭博場、女郎屋ヲ此商埠地域埠頭ニモ移転ヲ通知シテ来タノデ、一時逃レテ合図シテ1軒ノ料理店ヲ埠頭ニ開イタガ、ソノ危険ナノト収支漸クニ相イフ位デアッタノデ、ソレヲ口実トシテ引揚ゲ、支那側ノ施設モ寂レテ了ッタノデアルガ、最近ハ日本人排斥ノ意味カラデモアラウガ、日本居留民ヲ再ビ右ノ開埠地ニ移転スベク強要サレテヰルト云フ。在留邦人48名デ、内6名ハ之ヲ除イテ他ハ皆娘子軍デ、医院1軒アリ（他ニ鮮人医師1人アリ）。現在小川澄氏ノ経営ニ係ル精米所ハソノ機械設備等相当ニ良ク、ソノ成績ハ順調ノ中ニアリ。邦人ノ発展地トハ聊カ不適ノ地ナラン。サレドソノ四囲ニハ山ヲ繞ラシ風光ハ大イニ佳ニシテ、又吾人一行ノ到レル時ニハソノ道路ノ修築ニモ意ヲ注ギ、ポプラノ並木ヲ発見セルハ意外ナリキ。又煉瓦建ニシテ洋式ヲ加味セル二階建ノ商舗ガ続々ト竣工ノ域ニアルヲ見テ、当地ノ仲々活気ナル事ヲ知レリ。

第7章　湯源

第1節　位置

松花江ノ左岸三姓ヨリ約80支里、ハルピンヨリ約730支里ノ湯旺河ノ河口ニ在リ。

第2節　沿革

光緒31年ニ開放シ開墾局ヲ置キ、同年ニ治県シテ湯源県ト称セリ。元ト吉林省依蘭府ニ属セシガ、同34年吉黒両省ノ境界画定ノ結果、黒龍江省ニ属スル事トナレリ。

第3節　人口

戸数ハ500戸、人口ハ約4,000人ナリト云ハル。

第4節　市街ノ状況

市街ハ東西ニ通ズル一条ヨリ成リ、商家ハ50戸ト称セラルヽモ普通ノ部落ニ過ギズシテ、市街トハ名ノミナリトス。

第5節　官公衙

湯源県公署、警察所、兵営、巡防隊、税局、郵便局、商務会、勧学所、小学校等ナリトス。

第6節　産物

肥沃ナル耕地ト豊富ナル森林地帯ヲ背後ニ控ヘ、大豆、小麦等ノ農産物、木材、毛皮ノ輸出港ナリ。ソノ他ニ高粱、麦粉、栗鼠皮、鹿角、貂皮、焼酒、豆油、麻、粟、葉煙草、魚類ノモノトス。

第7節　商工業

当地ノ商工業ハ現在盛ナラザルモ、ソノ肥沃ナル曠野ト森林地帯ヲ控ユルガ故ニ、将来此等ガ開発セラルヽニ至レバソノ産物モ増加シ、商工業モ亦発達セラルヽニ至ルベシ。

輸入品ノ主ナルモノハ綿布、雑貨等ニシテハルピン三姓地方ヨリ移入サル。当地ニ於ケル商工業家ノ主ナルモノヲ下ニ挙グル事トスベシ。

焼鍋、油房、糧桟、磨坊、雑貨舗、薬舗、当舗、糧米舗、染房、醤園。

当地ハ前述ノ如クニ、埠頭ニシテ松花江ヲ航行スル汽船ハ必ラズ寄航ス。故ニ夏季ニハ寧ロ冬季ヨリモ旅客ノ往来ハ繁多ナリ。

第8章　樺川

第1節　位置

湯源県ノ北東110支里、富錦ヲ西方ニ170支里、哈尓浜ヨリ920支里、三姓ヨリハ270支里ノ地点ニシテ、松花江ノ右岸ニ在ルモノナリ（江岸ヲ距ル

事20支里)。

第2節　沿革

我亨保17年、三姓ニ副都統ヲ置クヤソノ管下ニ入リ、光緒32年臨江府ノ設置サルヽヤ之ニ属セリ。尓来往来スルモノ遂ニ増加シ、瀕江一帯ノ平野ハ年々ニ開墾セラレ、明治42年ニ上奏御裁可ヲ得テ、翌2年ニ独立シテ県治ヲ布クニ至リ、臨江府ノ管下ヲ脱シテ新ニ依蘭道ノ管下ニ転属セリ。当初ハ県公署ヲ佳木斯ニ置キシガ、同地ハ松花江岸ニ接シ音遠木河ノ下流ニアリテ、ソノ水害ヲ受ケシ事多カリシヲ以テ、民国2年更ニ現今ノ悦来鎮ニ県公署ヲ遷セルモノナリ。

第3節　戸口

此地戸数ハ200戸ニシテ、人口ハ約2,000人ナリトス。

第4節　市街ノ状況

本街ハ東西ニ通ズル一条ノミニシテ、商家ハソノ大小ヲ会計スルモ僅カニ60余戸ニ過ギズ、ソノ内ニテ比較的ニ大ナルモノハ4、5戸ノ雑貨商ニシテ、ソノ他ニハ見ルベキモノナシ。要スルニ此地ハ県所在地トハ云フモノヽ只一小邑鎮ニシテ、市内ハ寂寥タル一小市街地ナリトス。農産物ノ輸出港デ、埠頭ニハ粮桟ノ倉庫ガ30戸位並ビ、ソノ内新ラシイノハ大部アルノデ、丸ハアンペラノ苞ガソノ頭ヲ太陽ニキラキラサシテ照射シテヰル。港トシテハソノ前面ニ永久的ノ浅瀬ガアルノデ不便デアルガ、農産物ノ出廻リガ増加シテ相当ニ重要視サルヽ程ニナッテ来タカラ、将来ハ嘱目スルニ至ルデアラウ。

第5節　官公衙ソノ他ノ機関

樺川県公署、警察所、商務会、農務会、小学校、塩務局、電報局、郵便局、兵営、保衛団等デアル。

産物

此地産物トシテ農産品、魚類、焼酒等ノミニシテ、他ニ特記スベキモノナシ。

第6節　商業

当地ニ於ケル主ナル商家ハ次ノ如シ。

焼鍋1、雑貨商11、鉄物商2、木器店3、薬店5、銀細工店2、風呂屋1、車宿3、醋及醤油製造所1、劇場1、穀物商5、飲食店2、肉屋3、表具屋1、菓子商1、靴拉店2、油房2、理髪屋1。

輸出品ハ前記ノ穀類ニシテ、氷解季ヲ俟ッテ水運ヲ利用シテハルピンニ輸送サレ、輸入品ハ主トシテ雑貨ニシテ、是亦夏季水路ニヨリテハルピンヨリ来ルモノ多シトス。

第7節　工業

焼酒ハ原料約3万石ヲ消費し、225万斤ヲ製造ス。従来ハ県内ノ需要ヲ充タスニ足ラザリシヨリ、年々ペトナ方面ヨリ少カラザル輸入ヲナシ来リシモ、今ヤ県内産ノ増加ハソノ移入ヲ防止セルノミナラズ、県内住民ノ必要ナルノ消費ハ約100万斤ニテ足ルベキヲ以テ、残高100万斤余ハ総ベテ他地方ヘト輸出セラルヽソノ主ナル原因ハ、県内出穀ノ豊富ナルガ故ナリ。ソノ移出先ハ主トシテ露領方面ナリ。

第9章　富錦

第1節　位置

哈尓浜ヲ距ル事1,180支里、三姓ヨリ530支里ノ下流、ハヾロフスクヨリ325露里ノ地点、松花江岸ニ於ケル第2ノ繁盛ノ地デアル。樺川県城ノ東240支里、松花江ノ右岸ニ位シ、恰カモ下流ニ於ケルハヾロフスク及上流ハルピントノ中間ニ位シ、水運ノ便アルノミナラズ、特ニ此地ヲ起点トセル道路ハ南方ニ接スル宝清県トノ交通上ニ於イテソノ咽喉ヲ狎シ更ニ密県ニ通ジ、東方ハ饒河県ニ通ズル等水運並ニ陸運ノ便ヲ有スルノ要衝ニ当レリ。

第2節　沿革

一名富見克錦トモ称スル。元ト三姓副都統ノ管轄内ニアリ、光緒6年旗官協領ヲオカレソノ管理スル所ナリシガ、同32年臨江州ノ管下ニアリ、分防巡検ヲ置キテ之ヲ統治セリ。後多光ノ変遷アリシガ、宣統元年独立ノ県治トナレリ。

第3節　戸口

此地ノ戸数ハ約6,000戸ニシテ、人口ハ約5、6万人ナリ。

第4節　官公衙ソノ他ノ機関

富錦県公署、警察所、兵営、郵便局、電報局、税局、塩務局、木石税局、商務会、農務会、高等初等小学校等ナリトス。

第5節　市街ノ状況

元ト寂寥タル所ノ一部落ニ過ギザリシガ、最近ニハ著シクソノ発達ヲ遂ゲ、前記ノ如キ戸口ヲ算スルニ至レリ。市街ハ松花江ノ右岸ニ位シ、東西約2支里、南北約1支里ニ亘リ堂々タル機械製粉所存在シ、一般ノ家屋モ概シテソノ構造雄大ニシテ、清楚タル市街ヲ形成スル。当埠頭ノ特徴トモ称スベキハ、木製ノ多少見ルベキ桟橋ノ設備ヲ有スル事ニシテ、夏季開港間ハハルピン、ハヾロフスク及ハルピン、黒河間ヲ航行スル大小船舶ノ出入絶ユル事ナク、又ハルピン当地間ニハ特ニ定期汽船ノ運航ヲ見ル等、ソノ繁華ノ度ヲ窺フヲウベク、実ニ松花江ノ沿革ニ於ケル屈指ノ埠頭タリ。

第6節　産物

主ナル産物ハ、小麦、大豆、高粱、粟、玉蜀黍、麻、葉煙草、狐皮、虎皮並ビニ木材等ナリトス。

第7節　商工業

当地ハ元トハヾロフ方面トノ関係ノ密接ナリシガ、露国ノ擾乱後ハハルピン方面トノ関係漸次ニ密接ノ度ヲ加ヘタリ。移出品ハ大豆、小麦、麻等ハ水路デハルピン、ハヾロフスクニ輸出サレ、葉煙草、木材、豚毛、ソノ他皮類ハ、主トシテハルピンニ移出サル。

商品ノ仕入レハハルピンヨリ仕入ルヽガ大部分デアルガ、或ハ営口ニ大坂ニ上海ニ出張員ヲ派シテ直接ニ仕入レテ居ルモノモアル。先ヅ支那品ト半分半分、少シ日本品ノ方ガ割ガ多イデアラウ。松花江岸、同江マデガソノ勢力範囲デ、以前ハ200支里斗リ離レタモールトンカラモ露人ガ買出シニ来タサウデアルガ、最近ハ大シタ事ガナク、主トシテソノ背後ノ地方ノ百姓ノ需要ニ依リテ莫大ナ利益ヲ挙ゲテ居ルノデアル。ソノ他ウスリー地方トノ交通ガ便利ナルタメ、ウスリー沿岸ノ産物、即チ阿片、毛皮、鹿茸等ノ取引モ亦盛ンニ行ハルヽナリ。

工業トシテハ製粉会社ガ最モ重要ナモノデ、地場需要ノ他余力ヲ以テ、松花江下流地方及ウスリーノ沿岸地方ニ於テ、ハルピン製品ト競争シテ、相当ノ売行ヲ示シテ居ル。

焼酒ハソノ産額常ニ県内ノ需要ヲ充タスニ足ラズ、年々ペトナヨリ或ハハルピン地方ヨリ輸入シツヽアリシモ、近年ニ至リ之ガ製造ニ従事スルモノ漸次ニ増加ヲ来シ現在ハ3戸ヲ等シ、今ヤソノ輸入ヲ仰グノ必要ヲ感ゼザルニ至レリ。

豆油モ県産少ク、置県以来ソノ殆ンド全部ヲペトナ、ハルピン地方ヨリ移入シツヽアリシガ、現在ハ6戸ノ油房アリテ、而カモ全県ノ需要ハソノ生産高ノミ倍以上ニ達スルヲ以テ、尚幾多ノ不足ヲ感ジ、一部ハ宝清ヨリソノ他ハペトナ、ハルピン地方ヨリ輸入ヲ仰ギツヽアリ。

第8節　交通

水路ハハルピンヨリ黒河又ハ虎林行ノ汽船ノ寄港スルノミナラズ、哈尔浜ヨリ富錦止リノ汽船モソノ数多ク往復スル。冬ハ自動車モ此処マデ通ズル。此地ヲ起点トシテ、東方ウスリー沿岸ノ阿片ノ大集散地団山子ニ通ジ、宝清県ヲ経テ更ニ密山ニ通ズル四通八達ノ要衝ニ当ル。故ニ将来農産物

ノ激増スルニ伴ヒ、附近地方ノ発達ハ明カナルノ事実デアッテ、延ベテハ富錦モ亦依然トシテ松花江沿岸ノ中心商業地トシテ益々膨張発展シ行ク事ハ、論ヲ俟タザル所ナリ。

第10章　臨江

第1節　位置

哈尔浜ヨリ1,340支里、松花江ノ黒流江ニ流レ込ム点ヨリ遡ル事約20支里ノ右岸ニアリ、富錦ノ北東約100支里ナリ。

第2節　沿革

元ハ三姓副都統ノ所轄地ナリシガ、光緒32年此地ニ臨江州ヲ創設シ、宣統元年（明治42年）臨江府ニ昇格シ、新設ノ樺川、綏遠州及富錦ヲ管轄セシメタルモ、民国2年更ニ改メテ臨江県トナシタリ。然ルニ臨江ノ県名ハ奉天省連辺道管下ニ同名ノ県アリテ、種々ノ間違ヒヲ生ゼシガタメニ、遂ニ同江ト改称スルニ至リタルナリ。

第3節　戸口

此地ノ戸数ハ約400戸ニシテ、人口は約4,000人ナリトス。

第4節　市街ノ状況

城壁ナク広漠タル平野ノ中ニ地画ヲ定メテ木造ノ門柱ヲ建テタルノミニシテ、街衢ハ松花江ニ平行セル一条ノ街ヨリ成リ、北側ニ航行船舶ノ発着スルノ埠頭アルモ荒涼寂漠タル一市街ニシテ、建築物ノ見ルベキモノナク、県公署ノ如キモ四面ノ名ノミノ土塀ヲ囲ラスニスギズ。支那市街ニ附キモノヽ劇場モナク、遊郭モナク、賭博場モナク、全ク河口もナイ物淋シイ静カナ一個ノ田舎町デアル。

第5節　官公衙ソノ他ノ機関

同江県公署、警察所、高等初等小学校、税局、郵便局、商務会等トス。

第6節　商工業

松花江ノ河口近ク、交通上絶好ノ地点ヲ占メテ居ルニモ拘ハラズ、税関ト県庁ト軍隊ガアルノミデ、商業上ノ価値ハ殆ンド認ムベキモノナク、寧口国防上重要ノ地位ニアルノデアル。黒龍江ト松花江トヲ航行スル汽船ノ寄港地ニシテ、燃料供給上ノ好位置タリ。雑貨ハ主トシテハルピン方面ヨリ、牛豚ハ三姓地方ヨリ移入スル。主ナル店舗ハ造酒業、雑貨商、木器店、鍛治屋、薬店、製油業、製粉業、車宿、理髪業、肉屋等ナリ。

工業ノ主ナルモノハ、製油、造酒、製粉ノ3者ナルガ、此内製油即チ油房ハ1ケ年約40,000斤ノ油ヲ製出シ、ソノ大部分ハ当県内ノ需要ニ充テ、他ハソノ開江期間ニ於テ富錦ニ送ラル。

第7節　農産物

土地多ク住民ノ少ナキ当地方ハ、夙ニ移民ノ計画アリ。光緒32年ニ荒地ノ払下ニ着手シタルヲ初メトシテ、各種ニヨリテ移民開墾ノ事業ガ起サレタノデアル。

(1) 新タニ開墾スルモノデアルタメ、比較的ニ多クノ牛馬ヲ使役シナケレバナラナイノニ、蚊類ガ此等ノ牛馬ヲ刺スニ止マラズ、耳ニ入リ鼻ヲ犯シ遂ニハ驚乱ニ陥ラシメ、之ガ為ニ衰弱シテ死ニ至ルモノ甚ダ多ク、此等ノ補給ノ困難ナリシ事。

(2) 交通ノ不便ノタメ、収穫ノ時ヨリ以後ニ於テ馬賊ノ襲撃ノ屢々行ハレタ事。

(3) 解氷期ヤ雨期ニ江水ガ溢レテ既墾地ヲ害シタ事等ノタメ、移民ノ招来トソノ開墾ノ奨励トハ当局ノ最モ意ヲ致シタルノ所デアルニ拘ハラズ、終ニ失敗に終ッタノデアル。サレドモ最近ハ1年ニ500人位ノ労働車ガ入リ込ミ、昨年ノ如キハ山東ノ避難民モアッタノデ約1,000人位ニ上リ、之等ガ此地方ニ土着シテ凡ユル艱難ト闘ヒツヽ開墾ニ従事セルタメ、漸ク大豆ノ産額モ増加シテ、昭和元年ニハ大豆5,000石ヲ移出スルヤウニナッタト

云フ事デアル。而カモ県知事ガ厳格デ阿片ノ耕作ヲ許サヾルタメ、他ノ地方ト異ナリ之等ノ労働者ガ年々移動スルト云フ事ガナク、大抵ハ土着シテ了フノデアルカラ漸次ニ奥地ガ開墾サレ、萩ヤ女郎花ガ咲キ乱レテ居ル曠原カラ大豆ヤ小麦ガ産出セラレ、今日眠レル此同江ノ市街モ富錦ヤ佳木斯ノヤウニ繁ニナルノデアラウガ、今暫クハ現状維持デアラウ。

第8節　交通

同江ハ松花江ト黒龍江トノ合流点ニ接近シテヰルノデ、地理上ヨリ之ヲ見レバ、松花江ノ上流ノ各地ヤ黒龍江ノ上下流及ウスリーノ沿岸各地ト直接ニ交通取引ヲナスニ最モ有利ナルノ地点にアルガ故ニ、拉哈蘇々海関モ設ケラレタノデアラウ。夏季、松、黒、鳥ノ三江ノ通航船ガ此処ニ寄泊スルアリ。陸路ハ綏遠ニ通ジ、又冬季ハ富錦マデ往復スル自動車モ、特ニ電信ヲ以テ喚ヘバ此処マデ来ルト云フ。同江ヨリ下ル事約20支里ニシテ松花江ハ黒龍江ニ流レ込ミ、大キナ三角州ヲ形成シテヰル。此三角洲デハ、阿片ノ栽培モ盛ンニ行ハレテ居ルト云フ。近クソノ一端ガハヾロフスクノ対岸ニ、現在ノ綏遠県ノ市街ガ移転スルノデアラウト云ハレテヰル。松花江口ニハ別段埠頭ノ設備モナイ。故ニロシヤ汽船ニ連絡シテ乗込マウトスルトキハ、同江カラ別ニ小舟ヲ傭フテ松花江口ノロシヤ側ノ方ニ停泊シテヰルロシヤノ砲艦ニ趨イテ、同艦上デ待チ合ハサナケレバナラナイノデアル。

以上

（完了）

JIFAC lecture series, no.1 (Spring 2009) Prof. Fujita, Aichi University

東亜同文書院の歩みと中国「大調査旅行」について

愛知大学教授　藤田 佳久

藤田佳久博士：愛知大学教授・東亜同文書院大学記念センター長

本発表は、一九〇一年に中国上海に日本の東亜同文会が設立した高等教育機関でビジネスクールの性格を持った東亜同文書院の一九四六年閉学までの歩みと、学生である書院生が行った中国および東南アジア一帯での「大調査旅行」の実態およびそれらの成果である旅行日誌と調査報告の性格、そしてそれらの諸記録から読み取れる主に清朝末期から民国期の中国の地域像の特性について、その若干を述べさせていただく。

一．東亜同文書院の設立には、三人の主役がその役割を果たした。一人は荒尾精、もう一人は根津一、そしてもう一人が近衛篤麿である。そのうち荒尾は明治維新のあと新生日本陸軍に入り、九州熊本鎮台時代に清朝下の中国情報に接し、中国に強い関心をもった。上海で日本初の国際商人となっていた岸田吟香の世話になり、さらに漢口で中国の実態を観察し、大著『清国通商総覧』を出版。当時欧米指向の強かった明治政府に、隣の中国の存在とその貿易相手としての可能性を主張した。そして自ら上海に日清貿易研究所という学校を設立し一五〇人の日本人学生を教育したが、日清戦争で中断、日清戦争後、一八九八年に東亜同文会が設立されると、東亜同文会の中国との文化交流事業の具体化の中で東亜同文書院構想を実現させた。但し院長は親友である根津一に託した。根津院長は財政が乏しい東亜同文会のために、書院の学校経営の工夫として、各県から県費学生として二人づつの入学を認めることを各県知事からとりつけ、この方法によって優れた学生を各県か↳

（注）　2009年3月、本学東亜同文書院大学記念センターがシカゴのシェラトンホテルで開催されたアジア学会へ展示などで参加をしたが、この原稿はそのあとシカゴ大学で行った講演会のうち筆者の講演のレジメ記録(日本文と英文)とシカゴ大学大学院生ジョン・パーソンが記録した参加記を、いち早くアメリカ在住の日系人雑誌 JINA (ニューヨークで編集刊行)5月号（２００９）が掲載したものである。参考までにそれらを紹介する。いろいろお世話いただいたシカゴ大学の奥泉氏とミシガン大学の仁木氏にお礼申し上げる。

ら入学させることに成功した。根津は王道思想を教育の根幹におき、書院精神を形成した。

また、近衛篤麿は東亜同文会の理事長として、東亜同文書院を日中間の教育文化事業の中心に置いた。近衛は貴族院の議長も経験する一方、ヨーロッパ諸国を訪ね、留学しており、当時の開明的な指導者であった。こうして、東亜同文書院は日中間の文化交流事業のシンボル的存在としてリベラルな性格を持ってスタートした。

二、東亜同文書院の設立目的の根幹には、荒尾精の考え方が有り、日中間の貿易実務者の養成があった。そのため、教育の重要な柱のひとつに中国語の徹底的な教育があり、そのため日本最初の本格的な教科書がつくられた。そしてこの中国語を使用して清朝末期の商取引の調査や実践がトレーニングされた。

三、そしてそののち最も重要な教育になったのが、中国を中心に東南アジアにまで広がった書院学生による大調査旅行であった。それは一九〇七年から始まり一九四二年（一部は一九四三年）までの約半世紀に及んで継続して行われた。最終学年の学生たちは、毎年二人から五－六人で自由にチームを作り、自分たちの設計による調査コースと調査テーマを設定し、四ヵ月から六ヵ月の徒歩中心の調査旅行を実施した。その調査ではコースにしたがった毎日の日誌と調査報告書が作成され、調査報告は卒業論文になり、多くの力作を生んだ。日誌は生き生きとした当時の各コース沿いの状況を伝えた。そのテーマは当初の商取引調査から経済、社会、文化へと広がり、総合的な中国研究へとアカデミーの世界にも発展した。それがのちに大学へ昇格する契機にもなった。

その総コース数は七〇〇ほどに達し、主に当時の農村地帯が活写されている。中国について言えば、チベットと新疆の主部を除いた中国のメインランドと満州地区はほとんどを歩いており、膨大な調査旅行記録が貯えられた。当時の中国は、清朝末期の混乱期から辛亥革命、さらに軍閥による↳

地域支配と軍閥間の激しい戦争がつづき、また、その中で急増した土匪による社会不安、さらに国民党と共産党の戦争、そして日中戦争へと混乱期が続いた。その中で、五〇〇〇名近い学生は色々危険な体験もしたが、病死以外の犠牲者はなかった。たとえば、辛亥革命のきっかけになった漢口の戦乱時に二チームが巻き込まれ、捕えられたが、東亜同文書院生だと分かった途端、敬意をもってすぐ釈放されている。

いずれにしても、当時の中国の混乱期の中で、中国自身も、また中国に進出していた欧米の列強諸国も、このような当時中国の実状把握はしておらずその点でも東亜同文書院学生の半世紀に亘る各地域記録は重要かつ貴重で、今日の中国の基盤としての基礎構造を解明する上でも重要である。

四. 戦後の日本における中国研究者による東亜同文書院とその中国研究は無視された。中国の文化大革命時代までの日本の中国研究者は事実よりはイデオロギーが強く、東亜同文書院が上海に存在したことで書院を日本の植民地経営の先兵とみなし、その膨大な研究成果も無価値とされた。それが変わったのはベルリンの壁の崩壊以降であった。筆者がそれより前から進めていた大調査旅行の研究が、マスコミも含め注目されるようになり、実証的な研究が進められるようになった。中国側もイデオロギー的に無視してきたが、今日では若い研究者を中心に書院の実像に迫りたいとする研究者が増えつつある。

五. 筆者の居る愛知大学は、東亜同文書院の教員や学生を中心に大陸から引き揚げて来たいくつかの大学も加わって一九四六年に設立された。愛知大学にはかっての東亜同文書院を経営していた東亜同文会から引き継いだ三万五千点の史資料があり、また卒業生からの多くの諸史料や書籍の寄附も受けている。現在それらを中心にして愛知大学東亜同文書院記念センターを設置し、展示や研究をおこなっている。ぜひ日本へこられたら、ご訪問いただければ嬉しく思います。